帝國圖書館藏

東京讀書研究會編

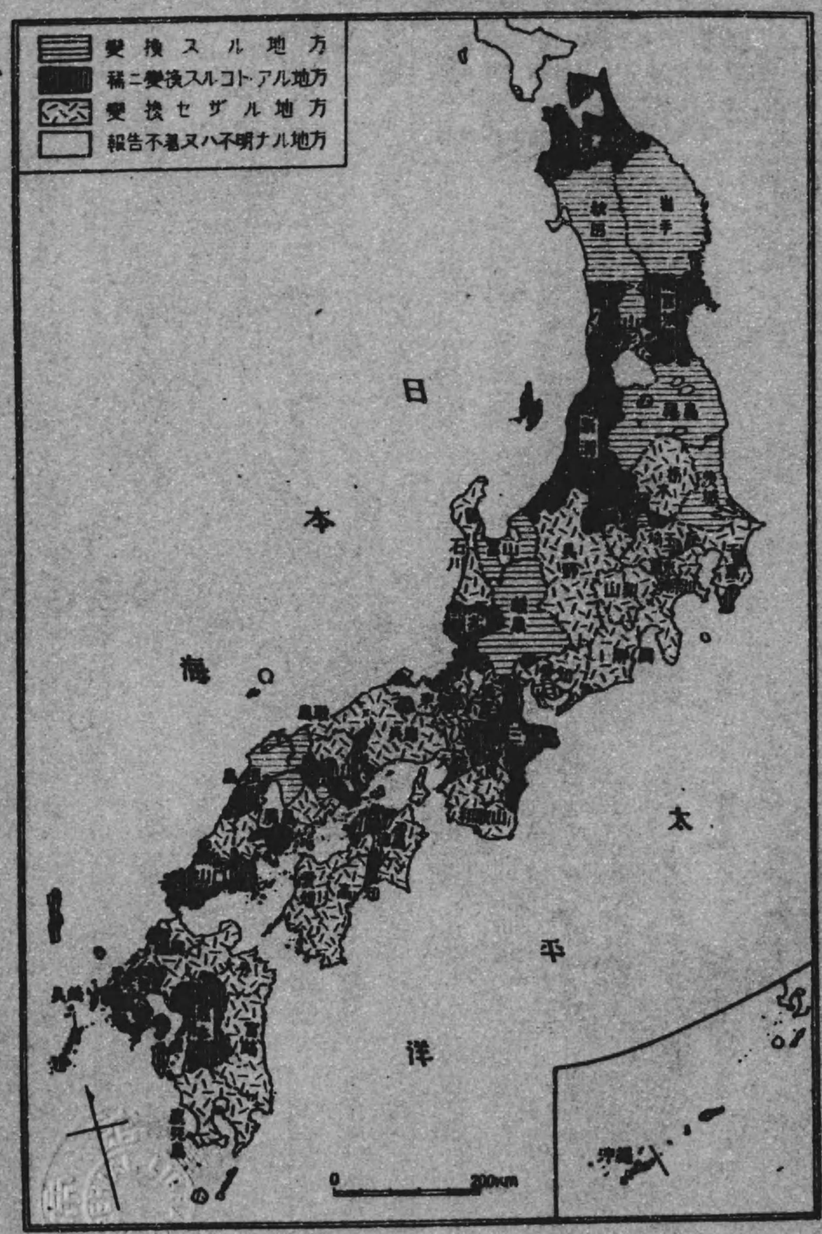
指導朗讀法

卷四

成美堂版

昭和十二年一月廿五日 帝國圖書館

「イ」列音「ウ」列音變換分布圖



文部省國語調査委員會の音韻調査部分各府縣音韻分布圖（明治三十八年文部省發行）による。この調査は文學博士上田萬年氏が主任で、新村出氏、金田一京助氏、柳原徳壓氏等によって、全國各地の音韻を調査し、その結果を纏められたものである。

263
523

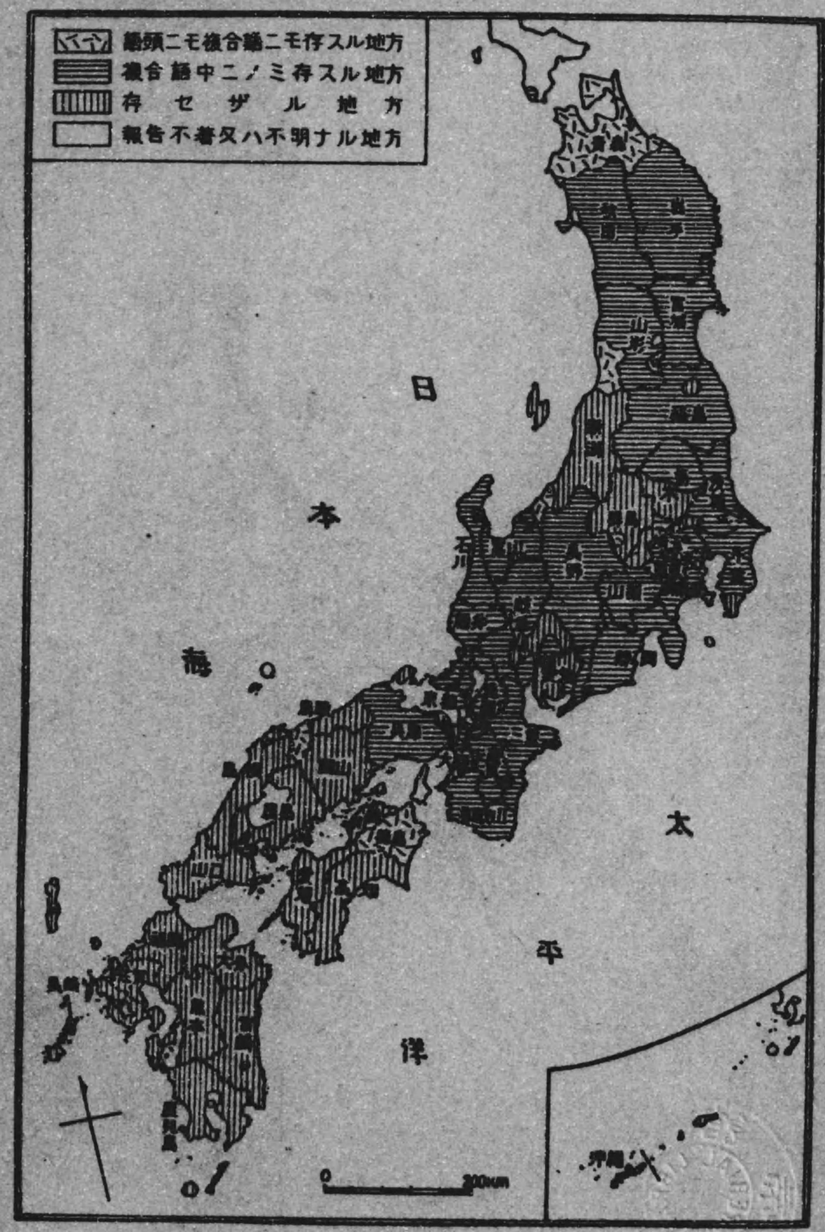
はしがき

國語の本質とその使命とに基いて、最近の國語教育は研究に實踐に著しい進歩を示してゐる。殊に新に編纂せられた小學國語讀本が、兒童の心理と生活とに即することを本體として、兒童語・生活語を重んじ、言語陶冶と讀解力の修練とを通して兒童の心情を純化し、日本精神を涵養しようといふ趣旨であるために、讀方がその正しい意味によつて取扱はれるやうになつて來たことは、誠に喜ばしい事である。

東京朗讀研究會は、かうした時代の進運に從つて、國語教育の進展と讀本指導の徹底とを圖る上に微力を盡したいといふ希望から、教材の研究と指導の要諦及び標準語としての正しい國語、國語讀本の文を如實に標準語化した正しい朗讀法の研究を目的として、志を同じうする會員が相集り、東京市の國語教育を外にしてはこのことの容易に企及すべからざるを自覺して、一致協力、その調査研究に眞摯な努力を續けて來たが、こゝに漸くこれならばと思はれる一定の規準を得たので、この研究の所產を發表して敢へて世の實際家に問ふことになつた次第である。

この發表については、平素の吾々の實踐に省みて、教材の要旨、指導觀、朗讀の姿と心、その注意、指導概要等を詳述して、實踐指導に關する正しい態度を示すことに力めた。これは現今の一般國語教育界の要求に對して、一層有意義なることと信ずる。教材の討究研讀を經て朗讀にもとづく讀方の要諦を明らかにし、以て指導の指針たらしめたこの擧によつて會員一同は今後の國語教育の上に得る所が多かつたことを私かに喜びとしてゐる。

圖布分 NG 音鼻行「ガ」ノ中語合複ビ及頭語



本書は固より研究の途上にある本會の一報告書ともいふべきものであつて、これを以て最善と自負するものではない。世の識者の叱正を仰ぎこれが完成を期すべきことを念願して止まない。たゞ本書によつて幾分なりと國語教育に貢献し、延いては標準語の確立普及と國語の純化統一とに寄與することを得るならばまことに望外の幸である。

昭和十二年九月

東京朗讀研究會

東京市社會教育課長　藤野重次郎
前東京市視學　五味義武
東京市視學　安西國太郎
東京市黒門尋常小學校長　木住野龜之介
東京市赤羽尋常小學校長　江藤俊明
東京市鶴卷尋常小學校訓導　工藤隆義
東京市淸鳥尋常高等小學校訓導　森廣
東京市櫻田尋常小學校訓導　久米井東
東京市高輪臺尋常小學校訓導　中村仁
東京市南櫻尋常小學校訓導　山本壽勇
東京市林町尋常小學校訓導　小川一郎
東京市四谷第一尋常小學校訓導　山本利一
東京一橋高等小學校訓導

凡例

一　要旨

教材の內容及び表現の讀解玩味を通して、兒童の智能を啓發し思想感情を豐かに培ひ、國語の教養と國民的精神の涵養陶冶に資すべき要旨を、簡潔に、明確に述べることを主眼とした。教材の客觀的要旨よりも實際指導上の目的要旨に力を注ぐといふ方針である。

二　指導觀

指導者が、該教材の學習を指導する上の心構について記した。教壇に立つ前に教師が先づ自分の腹をしつかりと決めてかゝらなければ、讀解指導の徹底は期し難い。素材の研究や、文意要旨の把捉に於て、文の構成、表現技法の觀察及び文字と語句の吟味、特に主想を表現する中心語句の觀方等について、指導上最も力を注ぐべき要點を擧げることにした。指導觀に於て特に留意したことは、部分と全文とを融合統一した觀點に立つて、語句節意等の吟味とともに文を一貫した想の流れに沿うて、教材の表現する一つのまとまつた思想感情をはつきりととらへることである。

三　朗讀

この欄は上段に讀本の本文を表し、その本文に對照して、その上に讀本の頁、下段に朗讀上の注意を示すことにしてある。本文は全部片假名を以て表記し、これに各種の符號を附けて、出來る限り、現代東京に於て最も廣く使用されて居る言葉の姿をあらはすやうにすると共に、文の意味や、味ひをよくあらはすことに力めた。アクセント等に疑問のあるものは、市内數千の兒童とその家庭の實際を調査して、多いのに從ふことにした。又下段には、符號の及ばない朗讀上の注意や、同音語アクセントの參考事項等を掲げておいた。

次に本書の符號及び朗讀上注意した事項について略説する。

(一)　表　音

本文は片假名を發音符號として、成るべく日常の言語に近く表記することにつとめた。なほ發音上、次のやうな特殊の符號を用ひてある。

(イ)　カ行濁音の中、通鼻音(ŋg)を子音とするものは、ガギグゲゴとした。

(ロ)　イとキ、エとエ、オとヲ、カとクヮ、ガとグヮ、ジとヂ及びそれを含む拗音、ズとヅ等は、東京語ではそれ〴〵區別をしないで、初に書いた文字の音の型に發音してゐるから、本書もこれによつた。

(ハ)　馬・梅・生まれる等の語は、それ〴〵 mma, mme, mmareru の如く發音するので、ンマ・ンメ・ンマレルといふやうに表記した。

(ニ)　長音・拗長音及び重母音は、棒引法で次の如くあらはした。

(例)　やうに＝ヨーニ　正月＝シ゚ーガツ　かはいらしい＝カワイラシー

(ホ)　eの母音の次にiの母音が續く場合、日常屢〻用ひられる言語では、eの長母音の如く發音するので、これによつてゐる。

(例)　時計＝トケー　兵隊＝ヘータイ

(ヘ)　捉音・拗音及び拗長音は次の表記法による。

(例)　行つて＝イッテ　去年＝キ゚ネン　牧場＝ボクジ゚ー

(ト)　母音は無聲子音に挾まれてゐる場合等には無聲化することがある。この場合には、母音の無聲化する字の左に黒點(・)を附してあらはす。但し特に發音をはつきりさせるために無聲化しない方がよい場合には黒點を省いてある。

(例)　父＝.チチ　聞きつけて＝.キキツケテ

(二)　アクセント

アクセントは聲の高低の關係である。本書は各單語(名詞にテニヲハの附いたもの及び、助詞に動詞や助動詞のついたものも一單語とみる)について、各音節間の高低關係を調べ、他の音節よりも比較的高い聲で發音する文字の右側に縱線を施し、各音節間に著しい高低を附けずに發音する語はそのまゝにおくことにした。前者は起伏式、後者は平板式である。

(例)　起伏式　ヤ|マ(山)　タカ|イ(高い)　コダカ|イ(小高い)

　　平板式　トリ(鳥)　スズメ(雀)

なほ日常二つの單語を連續していふ場合には、別々にいふ場合と異なる型にいふ現象がある。例へば　カヨッテ、

イマス（通つて居ます）は、特にイマスの意味を強める場合の外は、カヨッテ　イマスといふ型になり、ミテ　イマス（見て居ます）は、特にイマスの意味を強める場合の外は、イマスのアクセントが餘り高くならないのが普通である。これは場合によつて異なるものではあるけれども、本書は實際朗讀上の便宜を慮つて、總べて續けたために變つた方の型を本文にあらはし、もとの單語の型は朗讀上の注意の段に附記しておいた。

（三）聲の切り方

文章の意味や感じをよくあらはすことを主とし、更に兒童の息の續く程度も考慮して、左の符號によつて表記した。

、　聲を切るしるし。

、、　稍間をおくしるし。

、、、暫く休止するしるし。

、　人の言葉の終りの「と」に續く所等の如く、原則としては上の語に續ける筈であるが、一寸聲を切るやうな所のしるし。

（四）聲の强め方

特に强めて讀みたい言葉には右側に曲線（〜〜〜〜）を施し、なほ文として强めて讀みたい所は、それ〴〵下段に注意を記しておいた。

（五）調子の上げ下げ

人の言葉で語尾を上げるのを「上り調子」、語尾を下げるのを「下り調子」と名づけ、それ〴〵下の段に記しておいた。なほ文として、聲を或は高く、或は低く讀むべき所も、それ〴〵下段に記しておいた。

（六）速　さ

これも特に速く讀むべき所や、ゆつくり讀むべき所は、下段に記しておいた。何の注意もない所は普通の速さで讀んでよい所である。

一　指導概要

(1)教材の要旨を徹底させるために、指導觀に即し、兒童とその環境とを考慮して、指導の實際に對する用意、更にその指導方法の具體的な問題について必要な注意を記した。

(2)「教材」の項には、主として、文字、語句、文章及び言語修練等の、指導上の實際的事項を述べた。たゞ文字については、特に注意を要するもの、或は極めて輕い注意によつて、傳達受容の能率に大きな差等を生ずるやうな特殊なものゝみを拾ひ、語句は文章讀解上重要なもの、中心語句として重要なもの及び新出の難解なものゝみを擧げた。

(3)「挿畫」の項には、挿畫と本文との關係、挿畫の觀察法、利用法について述べた。

(4)「準備」の項には、實際指導に必要な準備の一切を網羅し列記した。

二　參　考

主として教材の原據、指導者の閲讀すべき參考書名、或は素材方面で、特に必要だと思はれる事項を研究して出來るだけ簡單にその要點を掲げた。

もくろく

一　富士の山……一
二　早鳥……六
三　海軍のにいさん……一七
四　カケッコ……二六
五　かぐやひめ……三三
六　たぬきの腹つゞみ……四六
七　月と雲……五〇
八　ヲヂサンノウチ……五九
九　山から……六六
十　山からの思出……七一
十一　大江山……七五
十二　鬼ごっこ……九二
十三　いうびん……九八
十四　ニイサンノ入營……一〇七
十五　すゞめ……一一四
十六　白兎……一一八
十七　豆まき……一二七
十八　百合若……一三四
十九　ひなまつり……一四八
二十　北風ト南風……一五二
二十一　羽衣……一六〇

一　富士の山

一　要旨

崇高優美な富士山は古來我が國民の誇であつて、國民的感情を高め來り、遂に日本精神の象徴とまでなつてゐる。此の詩は富士山の壯大・崇厳・優美な姿を文と繪とによつて、兒童の憧れを滿たしてやり、讃美の感を強めさせるのが主眼である。

指導則

此の詩の構想は崇高・優美の二節となつて歌はれてゐる。第一節は毅然として「雲の上」に屹立し、互に高さを競ふ「四方の山」を壓し、急に天象の變化に會へば物凄い電光雷鳴が起つても、それを下に聞いてゐる。かうした富士は崇高雄大なもので、實に富士は日本一の山である。第二節は、或時は天象一變して白扇を倒に懸けたやうな雄麗な姿を高く青空に輝かし、體には「雪の衣」を着流して、霞の裾を長く遠く引いてゐる。かういふ場合の富士は、優美そのもので、他に比すべき山がない。實に富士は日本一の山である。といふのである。かく我が日本の名山富士は、或時は男性的となつて古武士の風貌を想はせ、或時は女性的となつて端正な優しい姿を想はせるのである。

(二)　更に文の機構から見ると、

第一節では、高い空に浮いてゐる雲、其の「雲の上に」「あたまを出し」といふのであるから、如何に崇高であるか

が感ぜられ、「四方の山を見おろして、かみなりさまを下に聞く」といふので、高い上に更に壯大な心持を起させる。富士山を擬人視して、「頭を出し」「見おろし」「下に聞く」は大偉人の風貌を想はせ、しかも子供らしい自然の叫びである。

第二節では、「青空高くそびえ立ち」は如何にも氣品の高いことを現はし、「からだに雪の着物着て」「かすみのすそを遠くひく」は其の氣高い婦人のやさしい美しさを表はしてゐる。此の節も亦富士山を擬人視して、優しく美しい婦人になぞらへてゐる。

かくて此の心持から「富士山は日本一の山」と自然に歸結されたのである。

三　朗讀

1　頁　本文

イチ°°フジノ　ヤマ°°

アタマオ
クモノ　ウエニ　ダシ°
シホーノ　ヤマオ

朗讀上の注意

○「富士の山」と續けていふ時、ヤマのアクセントはあまり高くならない。

○「上に」のアクセントは平板式にいふこともある。

〔參考〕
クモ（雲・蜘蛛）

2

ミオロシテ°
カミナリサマオ
シタニ　キク°°
フジワ
ニッポンイチノ　ヤマ°°°

3

アオゾラ　タカク
ソビエタチ°
カラダニ
ユキノ　キモノ　キテ°
カスミノ　スソオ
トーク　ヒク°°
フジワ

シタ（下）　シタ（舌）
フジ（富士・不時）　フジ（藤）

○「富士は日本一の山」の句をリズムを主としていふ場合フジワニッポンイチノヤマのやうな型になり易い。かうなると「一の山」が強くひゞきすぎてよくないから、ニッポンイチノヤマのやうにいふのがよい。

○「そびえ立ち」を別々にいふ時、アクセントはソビエタチである。

○「雪」のアクセントはユキであるが助詞「の」に續いたため平板式になつた。

○「すそ」のスの母音は無聲化し易いが、こゝはさうしない方がはつきりしてよい。

ニッポンイチノ　ヤマ

■ 指導概要

（一）教　材

(1) 富士山を眺めた經驗について話させ、其の時の心持を發表させるがよい。

(2) 通讀の後、二節共「日本一の山」を摑ませて、何が日本一の山かを文の上から讀取らせる。そして第一節では「あたまを雲の上に出し」は、如何にも背が高い、つまり富士山は高い。「四方の山を見おろして　かみなりさまを下に聞く」は背が高い上に大きいこと、そして此の高い大きなことが日本一だといふ事を知らせる。第二節も大體第一節と同樣に取扱ふがよい。

あたまを雲の上に出し、
四方の山を見おろして、
かみなりさまを下に聞く、
} それ程高く大きな日本一の山である。

青空高く
そびえ立ち
} からだに雪の着物着て、
かすみのすそを遠くひく、
} それ程やさしく美しい日本一の山である。

(3) 此の詩には難語句といふべき程のものはないが、擬人視された語はよく味はしめなければならない。

○あたま＝は富士山の上部頂を表はす。

○見おろす＝毅然どした壯大さを表はしてゐる。四方の山からいへば、富士山を「見あげる」になる。

○下に聞く＝下の方に聞えるといふ事。

○そびえ立ち＝高々と立ち拔き出てゐるさま。「そびえ」を一層强めて「そびえ立ち」としてある。

○かすみのすそ＝「雪の着物」と「霞の裾」と對語にしてゐる。よく比喩したものである。

すそを遠くひく＝着物は之を着るといひ、裾は之を曳くといつてゐる。「ひく」は引くでなく、曳くである。

(4) 此の詩は七五調の定律であつて誠に誦し易いが、言葉の響（韻）が巧みに排列されてゐるので一層美しい感じを與へてゐる。內容にふさはしいから、よく朗讀の內に味はしめて欲しい。

(5) 新出文字としては、着　物の二字であるが、日常多く使はれる文字であるからさまで困難はあるまい。

（二）挿　畫

一頁から三頁まで一續である。富士山の崇高優美な姿を描いたものである。精進湖の岸から湖を隔てゝ見た眺め。

（三）準　備

掛圖と各種の寫眞類。

二　早　鳥

一　要　旨

成長した一本の楠の大樹を伐り倒し、刳抜いて舟を作り、農作物を運搬したといふ物語りによつて傳說の面白さと、傳說によつて見る創造的發展的な日本精神と、物の成長と生活發展との姿を感知させる。

二　指導觀

1、仁德天皇の御代の播磨風土記所載「速鳥」の傳說によつた早鳥物語りである。この原始的な傳說は非常に空想的で、憧憬的で創造的、又發展的な內容を盛つてゐる。子供のもつその本性的な心情を捕へて遺憾ない童話といへよう。

2、空想的

イ、どんな力が楠にあつたのか、晝も夜もぐん〳〵伸びた。

ロ、一かき水をかくと、舟は七つの大波をのり切る。

ハ、かうした不思議な魔性をもつ舟を早鳥と名づけた。

憧憬的（心はるかに思ひよる心）

イ、楠の高い梢に雲がかゝる。

ロ、繁つた枝は四方にひろがつて、見きはめもつかない。

ハ、日が出ても朝は西の村は日蔭になり、夕方は東の村がすつかり日蔭になつてしまふ。

ニ、今まで見たこともきいた事もない大きな舟に、大ぜいの船頭が乘つてえいや〳〵とこぐ。

創造的

イ、あのくすの木を切り倒してしまはう。

ロ、この木をくりぬいて、舟をつくる。

發展的活動的

イ、何十人、何百人のきこりが、毎日毎日大さわぎをして、切りたふした。

ロ、大ぜいの大工が集つて大舟をつくる。

ハ、早鳥はたく山の米、麥、豆、果實をつんで都へ通つた。

ニ、村は非常に豐かになつた。

3、この文は物語りであるから、はつきりした構成はないが、大體

イ、昔――のびて行きました。これは發端で序である。

ロ、「切りたふしてしまはう。」といふことになりました。こゝまでが舟を作る事にする迄の事柄即ちその理由である。

ハ、一さうの舟を作りました――造舟作業の有樣である。

ニ、「早鳥と名をつけよう」といひました――出來上つた舟の樣子と早鳥と名をつける迄の經路、

ホ、結び、そののち――――――といふことです。

4、この中に出る人物は

イ、村々の人たち――原始的な平和な純朴な人々

ロ、何十人、何百人のきこり

ハ、智慧のあるおぢいさん――童話の智慧者は經驗の多い老人にかぎつてゐるやうである。

ニ、大ぜいの大工、

これらの登場人物を生かして、この物語りのもつ空想的な憧憬的な創造的發展的活動的な部面を十分に感得さすべきである。

三　朗讀

4	5	6
本文	朗讀上の注意	
ニ。。ハヤトリ。。	○「あつたのでせう」の終は下り調子にいふ。	
ムカシ アル トコロニ イッポン	○「ある所に」と續けていふ時、トコロニ のアクセントはあまり高くならない。	
ノ クスノキガ アリマシタ。。ド	○「のびて行きました」と續けていふ時、イキマシタのアクセントはあまり高くならない。 ○「いつの間にか」はイツノマニカともいふ。 〔參考〕 クモ（雲・蜘蛛）	
ンナ チカラガ コノ キニ アッ	○「つかないやうに」と續けていふ時、ヨーニのアクセントはあまり高くならない。	
タノデショー。ヒルモ ヨルモ グ		
ングント ノビテ イキマシタ。。。		
イツノマニカ クスノキワ。ソノ		
タカイ コズエニ。トキドキ クモ		
ガ カカルホドニ ナリマシタ。。オ		
ーキナ シゲッタ エダワ シホー		
ニ ヒロガッテ。ドコマデ ツズイ		
テ イルノカ。ミキワメモ ツカナ		
イ ヨーニ ナリマシタ。。。		
マイアサ ヒガ デテモ。クスノキ		
ノ ニシガワニ アル タクサンノ		
ムラムラワ。ミンナ ヒカゲニ ナ		

リマス。マタ ユーガタ チカク
ナルト。ヒガシノ ホーノ ムラム
ラモ。スッカリ ヒカゲニ ナッテ
シマイマス。ソコデ。ムラムラノ
ヒトタチガ ソーダン シテ。ア
ノ クスノキオ キリタオシテ シ
マオー、ト ユー コトニ ナリマ
シタ。
コンナ オーキナ キノ コトデス
カラ。キルノモ タイヘンデシタ。
ナンジューニン ナンビャクニンノ
キコリガ アツマッテ。マイニチ
マイニチ オーサワギオ シテ。

○「東」を單獨にいふ時のアクセントはヒガシであるが、こゝでは助詞の「の」を伴つてゐるので平板式にいふ。
〔參考〕
ヒガシ（千葉子）
○「なつてしまひます」と續けていふ時、シマイマスのアクセントはあまり高くならない。
○「切りたふしてしまはう」を別々にいふ時、アクセントはキリタオシテ シマオーとなる。
○「いふことになりました」と續けていふ時、ナリマシタのアクセントはあまり高くならない。以下同斷

ヤット キリタオシマシタ。
コンドワ。キリタオシタ キオ。ド
ーシタラ ヨイカト ユー コトニ
ナリマシタ。スルト。アル チエ
ノ アル オジーサンガ イーマシ
タ。
コノ キオ クリヌイテ フネオ
ツクッタラ ドーダロー。
ナルホド ヨイ カンガエダ、
ト ミンナガ イーマシタ。
ソコデ。オーゼーノ ダイクオ ア
ツメテ。フネオ ツクリニ カカリ
マシタ。ソーシテ ナガイ アイダ

○「あるちゑのある」の後のアルは、はじめのアルに比べて幾分輕くいつた方がよい。
○「ちゑ」を單獨にいふ時は、チエであるがこゝでは助詞「の」を伴つてゐるので平板式にいふ。以下同斷

カカッテ。トートー　イッソーノ
フネオ　ツクリアゲマシタ。。。
イヨイヨ　ウミニ　ウカベテ　ミマ
スト。イママデ　ミタ　コトモ　キ
ータ　コトモ　ナイ。オーキナ　フ
ネデシタ。。ソーシテ　オーゼーノ
センドーガ　ノリコンデ。エイヤ
エイヤ　ト　コギマシタガ。オドロ
イタノワ。ソノ　フネノ　ハヤイ
コトデシタ。。センドータチガ。カイ
オ　ソロエテ　ヒトカキ　ミズオ
カキマスト。フネワ　ナナツノ　オ
ーナミオ　ノリキッテ。マルデ　ト

〔參考〕
イッソー（一艘）
イッソー（一層・一掃・一草）

○「見たことも」と續けていふ時、コトモのアクセントはあまり高くならない。

○「聞いたことも」は、キータ　コトモといつてもよい。

○「早いことでした」と續けていふ時、コトデシタのアクセントはあまり高くならない。

〔參考〕
カイ（櫂・貝・會）
カイ（効）

○「島のとぶやうに」を別々にいふ時、アクセントはトリノ　トブ　ヨーニとなる。

リノ　トブ　ヨーニ　ハヤク　ハシ
ルノデシタ。。
ミテ　イタ　ヒトタチワ。
ナント　ユー　ハヤイ　フネダロ
ー。。
フシギナ　フネダ、
ト　イーマシタ。。スルト。アノ　チ
エノ　アル　オジーサンガ。
イヤ　フシギデモ　ナンデモ　ナ
イ。。アノ　グングント　ノビテ
イッタ　クスノキダ。。ソノ　チカ
ラガ　ノリウツッタノダローー。。。
トリノ　ヨーニ　ハヤイカラ　ハ

○「舟だらう」の終は下り調子にいふ。

○「いや」はアクセント不定。

○おぢいさんの言葉の中、「いや」以下「のりうつったのだらう」迄は自信を持つた斷定的ないひ方であるから力强くいつた方がよい。

○「島のやうに」を別々にいふ時、アクセントはトリノ　ヨーニとなる。

ヤトリト　ユー　ナオ　ツケヨー、
ト　イーマシタ。。。
ソノ　ノチ。ハヤトリワ　タクサン
ノ　コメヤ、ムギヤ、マメヤ、クダ
モノオ　ツンデ。ミヤコノ　ホーエ
タビタビ　カヨイマシタ。。。
ヒカゲニ　ナッテ　コマッテ　イタ
ムラムラモ。ソレカラ　ダンダン
ユタカニ　ナッテ　イッタト　ユ
ー　コトデス。。。

■指導概要

（一）教材

(1) 此の教材は日蔭になつて困るから、切り倒した。これで舟を作つて、都にたくさんの米や麥や豆やくだものをつんで、たび〳〵通つてためになつたといふ具合に、あまり功利的に取り扱はないで、むしろ神秘的に取扱つて、童話的興味をもつ樣にしたがよい。不思議、魔性、神秘の中に、生々と伸展して止まない偉大さを感じさせたいものである。

(2) 新出文字、鳥、昔、枝、方、波、麥、豆、困るの八字讀替文字として、通ひ　夕方の二字が出てゐるが、九頁に亘る長文であるから、これ位の文字は修練さして行かなければならない。鳥、昔、枝、方、波、麥、豆、等皆この物語りの內容讀解にも重要な役割をもつ文字である事を忘れてはならない。

(3) 疊字、いよ〳〵、ぐん〳〵、とう〳〵、等にも理解と使用上の習熟に注意しなければならない。語句として、くすの木、こずゑ、しげつた、見きはめ、日かげ、さうだん、大さわぎ、やつと、ちゑ、くりぬく、かい、七つの大波、まるで、のりうつつた、みやこ、ゆたか　等は一つ一つの單語としても理解させて置かなければならない。七つの波には別に意味はないが、原文にさうあるからである。然し「七つの大波をのり切つて、まるで……」で舟の大きさと、舟の早いことを裏がきしてゐる事は事實である。

(4) 「おどろいたのは、その舟の早いことでした」の結果を先に原因を後にした言ひ方、さうだん、たふして、いふことです等の假名遣、ぐん〳〵、えいやえいや、まるで、ゆたか、見きはめもつかない、いよ〳〵等の語の修練にも注意しなければならない。

(5) 「ひるも夜も、ぐんぐんと。」は楠の旺盛な成長力。「雲がかかるほど、どこまでつづいてゐるのか、見きはめもつかないやうに」は大楠の巨大さを示してゐる。「やつと切りたふしました。今度は、切りたふした木をどうしたらよいか……。」にはこの大木を切りは切つたが、その始末に困じてゐる樣子が見える。「大ぜいのだい

くを集めて、……長い間かかつて、とう〳〵一さうの舟を作り上げました」。大規模の舟の趣が表現されてゐる。「見たことも、聞いたこともない大きな舟……大ぜいのせんどう……、おどろいたのはその舟の早いこと、まるで鳥のとぶやうに……。」この舟の偉大な性能である。「ふしぎな舟だ。」「あのぐん〳〵とのびて行つたくすの木だ。その力がのりうつつたのだらう。」は巨船の靈力を意味づけてゐる。「たくさんの米、……みやこの方へたびたび。」は早鳥のはたらきである。

これ等の表現の面白さを十分味ははせたいものである。

(6) 「昔ある所に」ではじまつて「といふことです」で終つた說話形式の代表的なものである。

(二) 挿畫

(1) 五頁　天を衝いてゐる楠の大木の半分ほども見えてゐない。その大きさは根元にたつて、あこがれに似た驚異をもつて見上げてゐる人達と比較して見るがよい。

(2) 九頁　木を刳り拔いて、獨木舟でその大きさは乘組みの人達の人數七つの波を乘り切るその樣子で想像される。

(三) 準備

掛圖。

五　參考

原據、日本書紀、古事記、

播磨風土記逸文――による。

原文には速鳥とある。然し本文には早鳥としたのである。

三　海軍のにいさん

一　要旨

歸宅した海軍の兄さんを中心とする家庭愛兄弟愛の和やかさを味はせるとともに、海軍に對する理解を深め、海事思想國防の觀念を養ふ。

二　指導觀

(一) 久しぶりで元氣な兄さんが歸つて來た。さしきへ上つてお父さんに御挨拶をする。お母さんはうらの畠からかけて來て、「あゝよく歸つて來たね」とうれしさうに言ひながらお茶を入れられる。作者勇君はうれしくつてそのまはりをとび歩く。誠に和やかな美しい家庭愛の情趣である。本文はかうした家庭の日常生活の記錄の中に、兄さんが語る海軍の話を挿入したもので、文は兒童自身の生活表現であり、海軍の兄さんを愛し喜ぶ純情から生れてゐる。指導上、この家庭的情味を味ひ浸りながら、「ぼくも大きくなつたら海軍だよ」といふ海軍への憧憬から、兄さんの話に聞入つてゐる間に、知らず知らず海軍思想が涵養されるやうに注意しなければならない。

(二) 本文に語られる海軍の話は、兄さんの話を作者が聞いたまゝに記述したものである。從つて海軍に關する教材として、又は航空母艦加賀の說明としては教師の適當な補說に俟たなければならないのであるが、この教材の趣旨はさうした補說を詳細にすることよりも、文にあらはれた兒童らしい觀察や感激を如實に讀取らせ、兄と作者との會話

又は父の言葉等にあらはれてゐる氣分を理解させることが主眼である。喜んでふざけて兄さんのばうしを冠るところ、帽子の金字から大日本軍艦加賀を知ること、食後の談笑の間に軍艦や飛行機の話を聞く面白さ、これらが作者の感激と喜悅とのまゝに如實に具體的に讀取られるやうに讀解の指導をすゝめることが肝要である。尋二の兒童に對する國防觀念の養成は、この興味と感激とによつてその根抵を養ふのである。

(三) 航空母艦加賀に關することは、國民としてその概念を得て置くべき大切な國防常識である。國防上空中戰の重要さを體驗してゐる今日、加賀の國家的使命の如何に重大であるかが考へられ、その使命を果すべく日夜訓練を重ね身命を捧げて奮鬪してゐる乘組の將士の勞苦を思へば、その盡忠報國の勳功に對する感謝と感激が國民の胸に強く湧き起る。快活で元氣な兄さんは、かうした重大な任務のもとに加賀に乘組んでゐるのである。加賀の性能について概念を得させるとともに、この兄さんに對する認識を深めて、軍民一致の精神と銃後の國民の心構へとを徹底させることを忘れてはならない。

三　朗讀

	本文	朗讀上の注意
12	サン。。カイグンノ　ニーサン。。	○全文を兄を久しぶりに迎へた子供の喜びが感じられるやうに讀むこと。
13	ボクガ　ベンキョーシテ　イルト。	○「ぼく」はボクと平板式にもいふ。

	クツノ　オトガ　シテ。ダレカ　ウチエ　ハイッテ　キマシタ。。デテ	○「はいつて來ました」「出て見ると」をそれ〴〵續けていふ時、キマシタ　ミルトのアクセントはあまり高くならない。
	ミルト　カイグンノ　ニーサンデシタ。。。	○「海軍のにいさんでした」は喜びに溢れた調子でいふ。
	ニーサンワ　ニコニコ　シナガラ	
	ザシキエ　アガッテ　オトーサンニ	
	ゴアイサツオ　シマシタ。ウラノ	
	ハタケニ　イタ　オカーサンモ　カケテ　キテ　アタマカラ　テヌグイオ　トリナガラ。	
	アー　ヨク　カエッテ　キタネ、	
	ト　ウレシソーニ　オッシャイマシタ。。	

〔參考〕

ウラノ（裏の）
ウラ（裏）
イタ（居た）
イタ（板）

○「かけて來て」と續けていふ時、キテのアクセントはあまり高くならない。

○「あゝ」のアクセントは不定。
○「よくかへつて來たね」は母親の慈愛をこめて、終は下り調子に。

ニーサンワ　マエヨリモ　ズット
イロガ　クロク　ナッテ　ツヨソー
ニ　ミエマシタ。。
オカーサンガ　オチャオ　イレテ。
ホントーニ　シバラクダッタネ。。
マー　ヒトツ　オアガリ、
ト　オッシャイマシタ。。ニーサンワ
オイシソーニ　ノミマシタ。。ボク
ワ　ウレシクテ　ソノ　マワリオ
トビアルキマシタ。。。
ニーサンワ。
イサム。。オーキク　ナッタネ。。イ
ー　コニ　ナッタ、

○「黒くなつて」と續けていふ時、ナッテのアクセントはあまり高くならない。
（參考）
ナッテ（成つて）
ナッテ（鳴つて）

○「まあ一つおあがり」の終は下り調子によむ。

○「勇」と呼びかけた矢の言葉は感慨をこめてちよつと間をおくとよい。

ト　イーマシタ。。
ボクモ　オーキク　ナッタラ　カ
イグンダヨ。ニーサン、
ト　ユート。
ソーダ　カイグンガ　イー。。ダイ
ジョーブ　ナレルヨ、
ト　ニーサンワ　ボクノ　アタマオ
ナデテ　クレマシタ。。
ボクワ　ウレシクテ　タマリマセン。。
ニーサンノ　ボーシオ　カブルト。
オトーサンガ。
カワイラシー　カイグンダナ。。ボ
ーシノ　オバケノ　ヨーダ、

○「海軍だよ」の終は上り調子に「にいさん」の終は下り調子にいふがよい。
（參考）
ユー（言ふ・結ふ）
ユー（勇）

○「さうだ」は發見したといふより然りといふ氣持。
○「大ぢやうぶなれるよ」の終は下り調子。

○「なでてくれました」と續けていふ時、クレマシタのアクセントはあまり高くならない。

○「おばけのやうだ」と續けていふ時、ヨーダのアクセントはあまり高くならない。

18

ト イッテ オワライニ ナリマ・シタ。。ボーシニワ キンデ ジガ カイテ アリマ・シタ。。

ダイニッポン。グン。。ソレカラ ナント ヨムノ、

ト キキマ・スト。ニーサンワ。ダイニッポン グンカン カガ、

ト オシエテ クレマ・シタ。。。

オフロニ ハイッテカラ。ミンナ イッショニ ゴハンオ イタダキマ・シタ。。

ニーサンワ ゴハンオ タベナガラ モ シジュー ニコニコ・シテ イ

○「おわらひになりました」を別々にいふ時、アクセントはオワライニ ナリマ・シタとなる。

○「大日本、軍」は拾ひ讀みするつもりで一字一字稍遲くいふ。

○「大日本」を別々にいふ時、アクセントはダイ ニッポンとなる。

○「何と讀むの」の終は上り調子。

○「だいにっぽんぐんかんかが」も數へてゐるのであるから稍ゆつくりいふ。

○「をしへてくれました」を別々にいふ時、アクセントは、オシエテ クレマ・シタとなる。

○「ごはん」のアクセントはゴハンともいふ。

19

マ・シタ。。ソーシテ グンカンヤ ヒ・コーキノ オモシロイ ハナシオ イロイロト シテ クレマ・シタ。。ニーサンノ ノッテ イル カガワ。タクサンノ ヒコーキガ ノセテ アッテ。ソレガ ヒロイ カンパンノ ウエカラ ジユーニ トンデ イクノダ ソーデス。。

グンカント イッテモ カガナドワ ウゴク ヒコージョーノ ヨーナ モノデスネ、

ト イッテ ニーサンワ ワライマ・シタ。。

○「のせてあって」を別々にいふ時、アクセントはノセテ アッテとなる。

○「とんで行くのだ」を別々にいふ時、アクセントはトンデ イクノダとなる。

〔參考〕

ヒロイ（廣い）
ヒロイ（拾ひ）

カガ（加賀）
カガ（蚊が）

オトーサンワ　ホー、ホー、トイーナガラ　カンシン　シテ　キーテ	○「ほう、ほう」といふ感嘆の言葉は稍長く延していふがよい。
イラッシャイマシタ	
ネル　トキニワ　ボクワ　ニーサント　ナランデ　ネマシタ	○「ねる時には」を別々にいふ時、アクセントはネル　トキニワとなる。

四　指導概要

(一)　教　材

(1)　作者は農村の兒童で、靴の音を聞いて出てみると兄さんであり、うらの畠にゐたお母さんがかけて來てあたまから手ぬぐひを取られるのを見落してゐない。觀察が詳細精密でしかもよく要點を明確にとらへ、兄さんに對する友愛の情をよく表してゐる。これらの事實氣分を如實に讀取らせ、實際の場面にひたり、作者の氣分に同化するやうに指導する。

(2)　軍人は兒童の憧憬の的であり、軍艦や飛行機は特に兒童の心理に歡迎されるところである。姿の勇壯さ、速度の速さ、活動的積極的でしかも國家的使命の遂行に突進するところ、絶好の教材である。十分に興味と期待とを抱かせ、適當に補說し、本文の趣旨を徹底させなければならない。

(3)　航空母艦は新時代の軍艦で、現時の事變に於けるその偉大な功績と、今後の國際的情勢に鑑みこの教材の重要さを考へ、十分愼重に研究して趣旨の徹底を圖らなければならない。この意味で、今次の事變の活躍についてはいふまでもなく、軍艦見學、海軍將士訪問、又は海軍に關する經驗の發表教師の補說等を取入れ、本文の實際化を圖り、印象を深めるやうにしたいものである。

(4)　文は順序よく叙事的に記述され、極めて自然で話の推移に無理がない。初めは兄さんを迎へたよろこびで、このうれしさは全文を一貫する基調となつて居り、讀解指導上、作者のうれしい氣分の記述を特に讀取らせる工夫をすれば、一層文を生かすことが出來るであらう。お父さんもお母さんもみなうれしさが一ぱいで、兩親のうれしさのあらはれてゐるところをとらへさせることも必要であらう。殊に結びの一句、「ねる時には、ぼくはにいさんとならんでねました。」は、誠に兄弟愛の純情さを端的に表現した名文で、よくその情を想像させ鑑賞させ玩味させたい。

(5)　新出文字では黑、勇、書、讀等の字形に特に留意を要する。舊讀本の字形と異る點が多い。又新出の語句では軍事に關する用語について特に注意し、よくその意義內容を理解させるやうに取扱はなければならない。

(二)　挿　畫

十七頁は勇君が兄さんの帽子をかぶつて敬禮のまねをしてゐる場面、本文のお父さんの言葉は「かはいらしい海軍」などと結びつける。

十九頁は航空母艦加賀、波を蹴つて進行中である。

(三)　準　備

掛圖、軍艦の繪葉書、摸型等。

三　海軍　の　にいさん

四　カケッコ

一　要旨

「負ケテモヨイカラ、シマヒマデ走ルモノダ。」といふ父の言を守つて、最後まで頑張り通した眞劍な努力に感激させ、道徳的意志的心意を陶冶し、運動競技の精神を涵養する。

二　指導觀

（一）運動會は學校生活に於ける最も感激的な行事で、殊に徒競走は一日のプログロムの花形である。出發線から決勝線まで、出場する兒童も應援する兒童も、運動場が一丸となつて、幼い者達の血は湧き肉は躍る。本文は、この勇壯活潑な徒競走の一場面を描いたもので、兒童自身の主觀的立場を中心とする表現形式によつた生活記述である。兒童は讀解の間に自らこの文の境地に侵り、作者の心情に共感し、感激の中に文の意圖する克己、忍耐、勇氣、努力等運動競技のフェアプレーの精神を感得することが出來るであらう。

三　參考

（一）本文は埼玉縣北足立郡小室小學校二年生關根勇君の原作によつたものだといふ。勇君の兄久一氏が軍艦金剛に乘務中冬の休暇に歸省した時のこと、海軍では百日航海すれば十四日の休暇が得られる。

（二）加賀は横須賀海軍工廠建造の航空母艦で、戰艦を改造したもの。

（三）運動會や徒競走の取材觀點は多種多樣であらうが、本課は轉んで後れた兒童が負けてもよいから最後まで努力したといふ意志的な行動を中心として記述したものである。二十三頁の「負ケルモノカ。」といふ强い決意には、男性的な日本精神の表れがあり、それが二十四頁の、「負ケテモヨイカラ、シマヒマデ走ルモノダ。」といふ父の言葉によつて、悲壯な正義心忍耐心となり、これに對して終の先生の言葉、「コロンデモ、ヨクシマヒマデ走ツタ。カンシンカンシン。」といふ賞讃が一篇の感情を一段尊く飛躍させて、美しく文を結んでゐる。これらの叙述を通して本文の情操を味はせるべきである。

（三）構想記述は時間的經過を追つて漸次高潮し、最後に至つて、父の言葉と同一精神の先生の言葉で終る。第一段は出發、第二段は懸命の疾走、第三段は不覺の轉倒、ここが中心で、特に父の言葉が文の山である。そして第四段が決勝線で、先生のお賞めの言葉で結ぶ。文を一貫してゐる作者の心情決意をよく讀取らせ、主想を把握させ、共感共鳴を誘起することが肝要である。

三　朗讀

頁	本文	朗讀上の注意
21	シ゛゛カケッコ゛゛ イチネンセーノ　ハタトリガ　スン 四　カケッコ	○本課は特に緩急・斷續に注意して讀むがよい。

デ。イヨイヨ　ボクタチ　ニネンセ
ーノ　カケッコニ　ナリマシタ。ボ
クワ　ムネガ　ドキドキ　シテ　キ
マシタ。。。

ボクタチ　シチニンワ　シュッパツ
センニ　ナラビマシタ。。。

ヨーイ、

ト　センセーノ　コエ。

ドン、

キクガ　ハヤイカ　カケダシマシタ。。
ソノウチニ　フタリガ　ボクノ　マ
エエ　ヌイテ　デマシタ。。

マケルモノカ。

○「ボクタチ」はボクタチともいふ。

〔參考〕
ムネ（胸・旨）
ムネ（棟）

○「ドキ〳〵シテ來マシタ」と續けていふ時、キマシタのアクセントはあまり高くならない。

○「並ビマシタ」の次はゆっくり休止をおくとよい。

○「ドン」のアクセントは不定。

○「開クガ早イカ」から「ハネオキマシタ」あたりまでは、息づまるやうな競走の氣持を表すために早目に讀むとよい。間や休止も短くする。

○「前へ」はマエエとエを二つ續けて發音する。

○「ヌイテ　出マシタ」を別々にいふ時、アクセントはヌイテ　デマシタとなる。

○「負ケル　モノカ」を別々にいふ時、アクセントはマケル　モノカとなる。

ボクワ　イッショーケンメーニ、ハ
シリマシタ。。

シッカリ。。

ハヤク　ハヤク。。

オーエンノ　コエモ　ゴチャゴチャ
ニ　ナッテ　キコエマス。。

モー　ナニモ　ミエマセン。。ボクワ
ムチューデ　ハシリマシタ。。スル
ト　ナニカニ　ツマズイテ　ヒドク
コロビマシタ。。

シマッタ、

ト　オモイナガラ　スグ　ハネオキ
マシタ。ガ。モー　ミンナカラ　ス

○「何モ」はナニモと平板にもいふ。

ッカリ　オクレテ　シマイマシタ。
ヨソーカ、
ト　オモイマシタ。シカシ。オトー
サンガ。
マケテモ　ヨイカラ　シマイマデ
ハシル　モノダ、
ト　オッシャッタノオ　オモイダシ
テ。マタ　イッショーケンメーニ
ハシリマシタ。
ワー、
ト　テオ　タタイテ　ワラッテ　イ
ル　モノモ　アル　ヨーデシタ。
キマリガ　ワルイト　オモイナガラ。

三〇

○「オクレテ　シマヒマシタ」を別々にいふ時、アクセントはオクレテ　シマイマシタとなる。
○「ヨサウカ」の次は殆ど切らぬのがよい。
○「走ルモノダ」と續けていふ時、モノダのアクセントはあまり高くならない。
〔參　考〕
マタ、マタ（又）
マタ（胯・叉）
○「ワア」のアクセントは不定。
○「手ヲタタイテ」と續けていふ時、タタイテのアクセントはあまり高くならない。
○「アルヤウデシタ」と續けていふ時、ヨーデシタのアクセントはあまり高くならない。
○「キマリガ　ワルイト」を別々にいふ時、アクセントはキマリガワルイトとなる。

ボクワ　ケッショー・センマデ　ハシ
リマシタ。スルト　センセーガ　ニ・
コニコシテ。
タロークン　エライゾ。コロンデ
モ　ヨク　シマイマデ　ハシッタ。
カンシン　カンシン、
ト　イッテ　ホメテ　クダサイマシ
タ。

○「シマヒ　マデ」を別々にいふ時、アクセントはシマイ　マデとなる。
〔參　考〕
ヨク（善く）
ヨク（慾）
カンシン（感心・奸臣）
カンシン（韓信）
○「ホメテ　下サイマシタ」と續けていふ時、クダサイマシタのアクセントはあまり高くならない。

四　指導概要

（一）教材

(1) 生活教材で、何處も運動會氣分の頃であるから、實際の生活體驗と結びつけて取扱ひ、事實の具象化を適切にし、作者の心情を如實に讀取らせるやうに努める。

(2) 克己忍耐努力等の道義的精神、殊に負けても最後まで走るといふスポーツの意氣は、これを修身訓話的に取扱ふことなく、兒童が本文讀解の間に、おのづから本文の生活と心情との實感にふれて理解し得るやうに取扱ふ

ことが肝要である。

(3) 競走に際しての急迫した場面や刹那の間に動く激しい感情其他作者の心意の變化を表現した語句を通して作者の心境にふれさせる。

イヨ〳〵ボクタチ二年生ノカケツコニナリマシタ。ムネガドキ〳〵シテキマシタ。

「負ケルモノカ。」ボクハ一生ケンメイニ走リマシタ。ボクハムチユウデ走リマシタ。

「シマツタ」ト思ヒナガラ、スグハネオキマシタ。「ヨサウカ。」ト思ヒマシタ。

シカシ、オトウサンガ、「負ケテモヨイカラシマヒマデ走ルモノダ。」トオツシヤツタノヲ思ヒ出シテ……。

キマリガワルイト思ヒナガラ、ボクハ決勝線マデ走リマシタ。

これらの語句によつて、作者の心情の變化をたどることが出來る。

(4) 最後の先生の賞讃の語は、父の言葉と趣旨が一致してゐること、この先生の態度が勝敗の事實よりも競走の精神を重んずる教育的な指導であること等を理解させ、「負ケテモヨイカラシマヒマデ走ルモノダ。」の主想がこに裏書されて十分に讀解味得されるやうにしたい。先生の情愛籠る言葉をきいて作者は何と感じたかは記してないが、よく想像させたい。

(5) 本文は兒童自身の切實な體驗から生れた生活記錄であつて、これを標準として、本文の指導から綴方と連絡し、生活文の練習へ發展させたい。

(6) 注意すべき文字語句としては、旗取、出發線、聞クガ早イカ、負ケルモノカ、オウエンノコエ、ツマヅイテ、笑ッテ、決勝線等。

(二) 挿畫

二十五頁は決勝線で理解ある先生から賞めていただいてゐる作者の姿、安心と喜びとの心情を想像させる。背後の旗をかついだ子は優勝者の一人であらう。

(三) 準備

掛圖、運動會に關する記錄ポスター寫眞等。

五　かぐやひめ

一　要旨

かぐや姫は竹の根方から竹取の翁の手に抱かれてつれ歸られ、幸福に美しい娘となつたが、所詮姫は人界の者ではなかつた。

翁、媼、村人等の切なる愛情にもそひがたく、月の世界にかへつて行かなければならないといふ美しい夢幻的な物語によつて、民族的傳承感情を多分に盛られた日本傳說の興味を十分に感じさせ、宗教的な報恩思想、昇天の神仙思想等を知らせ、進んで高く美しきものへの憧憬から、その浸潤をうけて向上せんとする情操の陶冶に資する。

二　指導觀

(一) 原作竹取物語には、幾多の戀愛が繪卷物のやうにくりひろげられてあるが、本課は勿論戀愛をとり上げること

なく、極くあつさりと童話化してある。原作竹取物語が平安朝時代の戀愛中心圖繪であるに反し、本課は月の世界に對する憧憬を主題としてゐる純情、あくまで淨らかな童心から讀まるべきものとして書かれてゐる。

(二) 本課は、二十一羽衣と同じく、昇天することを取扱つてゐる。子供のはるかなる空への憧れは、ものごころづく頃からはじまる。金色に耀く朝の太陽、赤々とゆれる落日、白々と淡いひるの月、煌々と照る夜の月、星の可愛らしいまたゝき、雲のたゝずまひ、全く空は子供の美しい夢であり、なつかしいあこがれである。本課がもつ愛と恩と美とそしてはるかなる空への憧憬とによつて、豐かな心の芽を育てゝ行かなければならない。

(三) (1) 愛

「竹取のおきな、」――やさしいおぢいさんである。

「もとの方が光つてゐる竹、」――それはかぐやひめの放つ光ではあるが、その光を見出したのは、竹に日毎純情をうちこんでゐる愛にみちた善良な翁の心の光ではあるまいか。意味深い光である。

「小さな女の子」――この上もない愛情をよぶ言葉である。

「手のひらにのせて、」「おばあさんと二人で、」「小さなかごの中に入れて、」――平和な翁媼の愛育の姿である。

「世間の人々は、……、」「とのさまからおく方に、」――すべての人々が、かぐや姫をどんなに敬愛したことか、それほど立派なやさしい美しい娘であつたのだ。

(2) 恩

「この子を見つけてから、……いつもお金が出て來ました、」

「おぢいさんはだんだんお金持になりました、」――しがない竹伐り商賣ながら正直に業をはげんだ報である。

「三月ほどたつと、十五六ぐらゐの美しい娘になりました」――既に神異があらはれたのである。

「月をながめては、何か考へて……。」――昇天の夜が近づくので、哀別離苦のやる方なき心である人間的な情、

「迎へに來てもわたすものか。」――何物にもかへがたき恩愛の情である。

(3) 美

「お月さまが十も出たかと、」――月光の明るさが、具象化されて驚異と神秘の崇高美を感ずる。

「目がくらんで、どうすることも、」――人爲のよく及ばぬところである。

「天人が雲にのつて、」――美しい繪である。

「今はし方がなく……月夜の晩には、どうか、私のことを思ひ出して下さい。」――姫の靜かな心が表はれてゐる人間的な哀別離苦の心情から、超人的な天女の心にかへつていく。そこに幽玄な天上の美、月の美がある。

「天人のようにして來た車にのつて、」――靜寂夢幻の美の極致である。翁も媼も兵も、すべての人々はたゞ恍惚と無我の境地のまゝ。「空へ上つて行つてしまひました」――悠久の空の彼方を見やるのである。

三　朗讀

頁	本文	朗讀上の注意
26	ゴ゜゜カグヤヒメ゜゜	○全體を話すやうに讀む。速度の變化を附ける所は十分氣をつける。
	タケトリノ　オキナト　ユー　オジ	
	五　かぐやひめ	

ーサンガ　アリマシタ　マイニチ
タケオ　キッテ　キテ　ザルヤ　カ
ゴオ　コシラエテ　イマシタ
アルヒノ　コト　モトノ　ホーガ
タイソー　ヒカッテ　イル　タケオ
イッポン　ミツケマシタ　ソレオ
キッテ　ワッテ　ミマスト　ナカ
ニ　チーサナ　オンナノコガ　イマ
シタ　オジーサンワ　ヨロコンデ
テノヒラエ　ノセテ　カエリマシタ
ソーシテ　オバーサント　フタリデ
ソダテマシタ　チーサイノデ　カ
ゴノ　ナカエ　イレテ　オキマシ

タ

コノコオ　ミツケテカラ　オジーサ
ンノ　キル　タケカラワ　イツモ
オカネガ　デテ　キマシタ　ソレデ
オジーサンワ　ダンダン　オカネ
モチニ　ナリマシタ
コノコワ　ズンズン　オーキク　ナ
ッテ　ミツキホド　タツト　ジュー
ゴロク　グライノ　ウツクシー　ム
スメニ　ナリマシタ　オジーサンワ
コノコニ　カグヤヒメト　ユー
ナオ　ツケマシタ
ソノウチニ　セケンノ　ヒトビトワ

○「こしらへてゐました」を別々にいふ時、アクセントはコシラエテ　イマシタとなる。

○「もとの方が」を別々にいふ時、アクセントはモトノ　ホーガとなる。

〔參考〕
モトノ（基の）
モトノ（原の・舊の）

○「わって見ますと」を別々にいふ時、ワッテ　ミマストとなる。

○「出て來ました」と續けていふ時、キマシタのアクセントはあまり高くならない。

○「大きくなって」と續けていふ時、ナッテのアクセントはあまり高くならない。

カグヤヒメノ　コトオ　キーテ。
ジブンガ　ムコニ　ナロー。ワタク
シノ　ヨメニ　クダサイト　モーシ
コミマシタガ。カグヤヒメワ　ドー
シテモ　ショーチ　シマセン。オジ
ーサンモ。ジブンノ　ホントーノ
コデ　ナイカラ　ワタクシノ　オモ
ー　ヨーニワ　ナリマセン、ト　イ
ッテ　イマシタ。ノチニワ　トノサ
マカラ　オクガタニ　シタイトノ
オコトバモ　アリマシタガ。カグヤ
ヒメワ　ソレモ　オコトワリ　イタ
シマシタ。

○「しょうちしません」を別々にいふ時、アクセントはショーチシマセンとなる。

○「思ふやうには」と續けていふ時、ヨーニワのアクセントはあまり高くならない。

コーシテ　ナンネンカ　タチマシタ。アルトシノ　ハルノ　コロカラ。
カグヤヒメワ　ツキノ　アカルイ
バンニワ　ツキオ　ナガメテ　ナニ
カ　カンガエテ　イル　ヨーデシタ。ハチガツ　ジューゴヤ　チカク
ナルト　コエオ　タテテ　ナイテバ
カリ　イマシタ。オジーサンヤ　オ
バーサンガ　ナゼ　ナクノカト　キ
キマスト。カグヤヒメワ。
ワタクシワ　モト　ツキノ　ミヤ
コノ　モノデ　ゴザイマス。ナガ
イ　アイダ　オセワニ　ナリマシ

○「私はもと月の都……」といふ言葉はやゝ遲く、悲しみの心のこもるやうに。

タガ。コノ　ジューゴヤニワ　ツ・
キノ　セカイカラ　ムカエニ　マ
イリマスノデ。カエラナケレバ
ナリマセン。ミナサンニ　オワカ
レ　スルノガ　ツラクテ　ナイテ
イルノデ　ゴザイマス、
ト　イーマシタ。オジーサンワ　オ
ドロイテ。
ソレワ　タイヘンダ。ムカエニ
キテモ　ワタス　モノカ、
ト　イーマシタ。
オジーサンワ。ナントカ　シテ　カ
グヤヒメオ　ヒキトメタイト　オモ

○「お別れするのが」を別々にいふ時、アクセントはオワカレスルノガとなる。
○「泣いてゐるので」を別々にいふ時、ナイテ　イルノデとなる。

○「それは大へんだ……」はやゝ速くいふ。
○「わたすものか」を別々にいふ時、アクセントはワタス　モノカとなる。

イマシタ。ソーシテ。コノ　コトオ
トノサマニ　モーシアゲマストノサマワ。
ソレデワ。ソノ　バンニワ　ヘー
タイオ　タクサン　ヤッテ。ツキ
ノ　ミヤコノ　ツカイガ　キタラ
オイカエシテ　シマオー、
ト　オッシャイマシタ。
イヨイヨ　ジューゴヤノ　バンニ
ナリマシタ。オジーサンノ　イエノ
マワリワ　ヘータイガ　イクエニ
モ　トリカコミマシタ。
ヨナカゴロニ　ナルト。キューニ。

○「このことを」と續けていふ時、コノ　コトオ又はコノ　コトオともいふ。

○「廻り」はマワリとワを明瞭にいひ、マーリとならぬやうに注意を要する。

オツキサマガ　トーモ　デタカト
オモー　ヨーニ　アタリガ　アカル
ク　ナリマシタ。。。
サー　キタゾ、
ト　ヘータイタチワ　ユミニ　ヤオ
ツガエヨート　シマシタガ。メガ
クランデ　ドースル　コトモ　デ
キマセン。。。
ソノトキ　タクサンノ　テンニンガ
クモニ　ノッテ　オリテ　キマシ
タ。。。カグヤヒメモ　イマワ　シカタ
ガ　ナク。ナイテ　イル　オジーサ
ント　オバーサンニ　ムカッテ。

○「思ふやうに」と續けていふ時、ヨーニのアクセントはあまり高くならない。

○「さあ、來たぞ」はやゝ速くいふがよい。

○「下りて來ました」と續けていふ時、キマシタのアクセントはあまり高くならない。

イマ　オワカレモース　コトワ
マコトニ　カナシュー　ゴザイマ
スガ。。。イタシカタガ　アリマセ
ン。。。ツキヨノ　バンニワ。ドーカ
ワタクシノ　コトオ　オモイダ
シテ　クダサイ。。。ワタクシモ　オ
フタカタノ　ゴオンワ　ケッシテ
ワスレマセン、
ト　イッテ。テンニンノ　ヨーイシ
テ　キタ　クルマニ　ノッテ。ソラ
エ　ノボッテ　イッテ　シマイマシ
タ。。。

○「今お別れ……」以下の姫の言葉はやゝ遲くいふがよい。

○「かなしうございますが」の次はやゝ長く間を置いて、あきらめの感情を表すやうに。

一　指導概要

（一）教　材

(1) この物語は傳承的日本童話であるから、あく迄民族的な感情のもとに、俗人界の利慾を超越した操守と、月に對する優美憧れの淨らかさを中心として、夢幻的に取扱ひ、教科書以外の補説的なものや、くだらない科學的詮議立てなどは絶對にさける事が大切である。

(2) 物語は十分に讀めるやうにする事が何より大切であるから、くり返し〳〵何回も讀ませ、表情的に迄進め、物語中に自らを沒入させる樣指導したいものである。

(3) 新出文字、女、娘、世（間）申し、晩、都、界、兵、追ひ、弓、矢の十一字、讀替文字、金、間、夜、別れ、夜、上つて、の六字、夜がヤ、ヨ、の二度讀替として出てゐる事に注意したい。尙ほ讀みに注意すべき點は、竹取、もとの方、二人、中、三月、人々、おく方、何年、八月、長い間、ひき止め、十、天人、下りて、し方、月夜、お二方、等であるが朗讀の部を參照して誤りなき樣にしたい。

(4) おきな、ざる、かご、手のひら、そだてる、金持、娘、世間、むこ、しようち、十五夜、つらく、いくへ、取りかこみ、つがへよう、かなし、いたし方　等の語句は十分解釋を與へて文の讀解上支障なからしめなければならない。

ぐらゐ、ならう、おことわり、かうして、むかへ、しまはう、つがへよう、かなしう、おせわ、等の語法上の假名遣ひにも注意を怠らないやう。尙ほ文中に、かうして、さうして、それから等といふやうな事件の推移を物語る語句が多いから時間的觀念をもつて取扱ふ要がある。

(5) 可なり長文であるから、文節を切つて指導することは大切であるが、單に字數の分量や、形式的の段落にのみ、墜せぬやうに、文の發展に即して取扱ひを進めて行かなければならない。

(6) 文章指導にあたつて、指導觀に述べた如く物語に盛られた　思想、愛、恩、美、はるかなる空への憧憬　等を十分に理解感得させ、恍惚として沒我の境地に迄導き、物語に讀みひたる底の指導が望ましい。

(7) 簡單な劇化等試みて學習能率を高めることも大切であらう。

（二）挿　畫

(1) 二十七頁、竹取の翁が竹の根方からかぐや姫をひろつた圖である。翁の服裝、及び驚異と純情に滿ちて手のひらにのせてゐるその表情に注意して見よう。

(2) 三十六頁、かぐや姫の昇天に嘆き悲しむ圖、翁、媼、の服裝を見れば當時の貴族生活をしのぶものがある。二十七頁のしがない竹取翁から、次第に金持になつたのがわかる。

(3) 三十七頁、かぐや姫の昇天である。

（三）準　備

掛圖、竹取物語。

二　參　考

原據「竹取物語」を童話化したものである。竹取物語は我國最古の物語で貞觀から延喜まで三四十年間の作であらうとのこと。

六　たぬきの腹つゞみ

一　要旨

月夜に狸の腹つゞみ、此の日本人傳統の滑稽愉快な空想を現實的に表現した童謡である。此の童謡を讀味はせて滑稽味と明朗の心を養ふ。

二　指導觀

（一）同じ月夜であるが前課「かぐや姫」の月夜は美しくも悲しいものであつた。此の「たぬきの腹つゞみ」の場合は明朗賑かな月である。涙の長篇傳説の次に此の快活な童謡を持來つた配合は誠に心理的に適つてゐる。

（二）想像であり、空想であるが、眼前に現實として見せるやうに表現された詩であるのがよい。「さあ、さあ、集れ、月が出た。みんなで、つゞみのうちくらだ。」といつて集れの合圖をする。此の合圖は又腹つゞみである。すると、「やぶのかげから、木かげから、ぬつくり、ぬつくり、」子だぬきが出て來て、親だぬきをまん中にして、「ずらりと並らんでわになつた。」此の「ぬつくりぬつくり」出て來る樣子が面白い。親だぬきをまん中にして「ずらりと並んでわになる」のも面白い。「空には圓いお月さま」が美しく靜に照らしてゐる。山の上である。「白い雲」が「ぽつかりうかんで」ゐる。誠に靜かな山の上の月夜である。此の靜かな美しい「月にうかれて、」我がもの顔に浮かれ出して、「ぽんぽこ、ぽんぽこうち出して」つゞみの打ちくらをしてゐるのである。見えるやうであり、聞えるやうである。滑稽な想像であり、愉快な童謡である。

（三）此の童謡は叙事的な詩の表現で、一部分七五調のところもあるが、八五調本體のものであつて、愉快さ滑稽さが如何にもよく味はれる。

三　朗讀

頁	本文	朗讀上の注意
38	ロク゜゜タヌキノ　ハラツズミ゜゜	○山の上で月にうかれて親子のたぬきがわになつて腹つゞみを打つ滑稽な情景を思ひ浮かべながら、リズムにのつて快活な調子で讀む。
39	サー　サー　アツマレ　ツキガデタ。	○「月が出た」と續けていふ時、デタのアクセントはあまり高くならない。
	ミンナデ　ツズミノ　ウチクラダ。	
	オヤマノ　ウエデワ　オヤダヌキ。	○「お山の上では」を別々にいふ時、アクセントはオヤマノ　ウエ｜デワとなる。
	ポンポコ　アイズノ　ハラツズミ゜゜	

ヤブノ　カゲカラ　コカゲカラ。
ヌックリ　ヌックリ　コダヌキガ。
デテ　キテ　オヤマエ　アツマッテ。
ズラリト　ナランデ　ワニ　ナッタ。

ソラニワ　マルイ。オツキサマ。
ポッカリ　ウカンダ　シロイ　クモ。
ツキニ　ウカレテ　ハラツズミ。
ポンポコ　ポンポコ　ウチダシタ。

○「ぬっくり、ぬっくり」は子だぬきが出て來る樣を思ひながらゆつくりいふ方がよい。
○「出て來て」と續けていふ時、キテのアクセントはあまり高くならない。
○「わになつた」と續けていふ時、ナッタのアクセントはあまり高くならない。
○リズム正しくいふ方が面白い。そのために、「やぶのかげから」「月にうかれて」の始めや「空には圓い」の終と次の「お月さま」との間に⅛の休止をおくがよい。
「圓い」をマールイといはない方がよい。

一　指導概要

(一)　教材

(1)　此の叙事詩的表現の童謡を味はせるには、その場面や情景を文と挿畫の上から想像させ、而も此の童謡に用ひられた言葉の調子をよく讀味はせなければならない。

(2)　狸については、「かち〳〵山」で親んでゐるから想像もされようが、出來るなら今一度狸を觀察させて置きたいものである。そして此の狸が月夜に腹つゞみを打つのかと思はせて置くがよい。

(3)　通讀の後、第一節は親狸が集れの合圖をしたこと、第二節では子狸がぬつくりぬつくり出て來て輪になつたこと、第三節では親子の狸が月に浮かれて腹鼓をうち出したことを讀み取らせ、感想を發表させる。

(4)　更に讀みを深めて、感想を中心として、各節を玩味する。

第一節は「さあ、さあ、集れ、」を中心として、親狸の滑稽な樣子を想像させ、第二節は「ずらりと並んでわになつた。」を中心として、子狸がぬつくりぬつくり出て來て親狸をまん中にして、ずらりと輪になつた動作の滑稽さを味はせ、第三節では「月にうかれて、腹つゞみ」を中心として、狸どもがまん丸い月に浮かれて一晩中腹鼓を打つただらうと想像させる。挿畫の一匹一匹の姿態をよく觀察させるがよい。

(4)　新出文字は　腹　親　圓　の三字、讀替文字　木の一字である。腹まき　親子のたぬき　圓い圓い月　木の葉が落ちる　等と練習するがよい。

(二)　挿畫

親子の狸が小山の上で圓い月の光を浴びながら、腹鼓に打興じてゐるところ、第三節の場面である。一匹一匹の姿

六　たぬき　の　腹つゞみ

態によく注意させるがよい。詩の內容と相俟つて滑稽味が橫溢してゐる。

(三) 準備

生きた狸の觀察、掛圖。

三 參考

唱歌 證城寺の狸囃。

七月と雲

一 要旨

月夜の晩に影踏をして遊んでゐた子供達が、月に雲のかゝつたのを見て、月が走る、雲が走ると互に言ひ爭つてゐる中、一人の子供が走るのは雲であることを發見し、これを立證した情況をよみとらせ、この子供の思慮深い發見的態度に感じさせ、科學的興味を喚起する。

二 指導觀

(一) 本文は科學的な內容を生活化し、說話的な形式をとつて表現した文である。即ち兒童がその體驗的な生活の間に、科學的眞理を發見するといふ內容を物語として叙寫した生活教材である。隨つてその指導に當つては、科學的な觀察態度の養成といふことを直接の目的とせず、どこまでも子供の生活表現として取扱ひ、兒童自身生活觀照の態度

に、各自をその境地に立たせて學習せしめなくてはならない。さうしてその間に雲の走る眞理を發見した賢い子供の叡知に深く感じさせ、その結果として科學的自然觀察の態度を馴致するやうに指導すべきである。

(二) その內容は、月夜の晩、五六人の子供達がかげふみをしてゐると、雲がかゝつて影踏が出來なくなつた。すると月を見てゐた一人の子供が

「あれは、お月樣が走つてゐるのだらうか、雲が走つてゐるのだらうか。」

とまづ問題を發したのである。

見てゐると、月は雲から出て走つて行く。そこで、一人の子供は

「お月樣が走つてゐるのだよ。」

といふ。さう思つて月を見てゐると、月は動かず、雲が大急ぎでとんで行くやうに見える。それでまた一人は

「お月樣ではない。走つてゐるのは雲だ」と反對論を出した。しかし何れも確たる證據はない。この論爭を聞いて初めから默つて、月を枝越しに見てゐた一人の子供は、

「こゝへ來て見たまへ。雲が走るか、お月樣が走るか、よくわかるよ。」

といつて、結論を言はずに、まづその見方を示し、解決は彼等自身に見出させたのである。

「わかつた、わかつた。走つてゐるのは雲だ、雲だ。」

眞の科學的態度はこゝに在る。かういふ所をはつきりつかんで、確たる根據に基づいて立證するこの子供の賢明な眞理發見の吟味から、科學的觀察、推理判斷の過程を面白く讀み味はせることが肝要である。

(三) なほ此の問題は嚴密にいふと、月も動いてゐるが、雲の走り方に較べると、ほんの僅かで、瞬間的に眼に映ず

る程顯著でない、それ故敢へて問題とすべきでない。兒童から質問でも出ない限り持出すには及ばない。本文に於て「動く」といはず「走る」といひ、又「大急ぎではなれる」といふ表現はこの爲である。

三　朗讀

本文

40
シチ・ツキト　クモ

41
ツキヨノ　バンデシタ
アル　トコロデ　コドモタチガ　ゴロクニン　アツマッテ、カゲフミオシテ　アソンデ　イマシタ
ソノウチニ　ツキニ　クモガ　カカリマシタ、ツキワ　クモニ　ハイッタカト　オモート　スグ　デ、デタ

朗讀上の注意

○本課は會話の言葉によつてその子供の性格なり、心境なりが表れるやうに特に留意して讀まなければならない。

〔參考〕
クモ（雲・蜘蛛）
バン（晩）
バン（番・盤）

○「あそんでゐました」を別々にいふ時、アクセントはアソンデイマシタとなる。

○「かゝりました」の始めのカは無擇化しない方がよい。

○「はいったかと」「出たかと」の次は切らぬ方がよい。

カト　オモート　スグ　マタ　ハイリマス、コー　ナッテワ　カゲフミモ　デキマセン、コドモタチワ　アソブ　コトオ　ヤメテ、シバラクツキオ　ミテ　イマシタ、スルト、ヒトリノ　コドモガ　イーマシタ、

アレワ　オツキサマガ　ハシッテイルノダローカ、クモガ　ハシッテ　イルノダローカ、

ツキワ　イマ　クモカラ　デテ　オーイソギデ　ハナレテ　イキマス、ソーシテ　ツギノ　クモノ　ホーエ

○「かうなっては」を別々にいふ時、アクセントはコー　ナッテワとなる。

○「あそぶことを」を別々にいふ時、アクセントはアソブ　コトオとなる。

○「見てゐました」と續けていふ時、イマシタのアクセントはあまり高くならない。

○「走って」のシを無擇化しない時のアクセントはハシッテとなる。

〔參考〕
イル（居る・入る）
イル（射る・鑄る・煎る・炒る）

○「ゐるのだらうか」は下り調子にいふがよい。

○「月は」から「走って行きます」までは少し早目にいふがよい。

○「はなれて行きます」「走って行きます」と續けていふ時、イキマスのアクセントはあまり高くならない。

○「雲の方へ」と續けていふ時、ホーエのアクセントはあまり高くならない。

ドンドン　ハシッテ　イキマス。

オツキサマガ　ハシッテ　イルノ

ダヨ、

ト　ヒトリノ　コドモガ　イーマシタ。

シカシ。ジット　ツキオ　ミツメテ

イマスト。ツキワ　ウゴカナイデ

クモガ　オーイソギデ　トンデ

イク　ヨーニモ　ミエマス。ソレデ。

オツキサマデワ　ナイ。ハシッテ

イルノワ　クモダ、

ト　ユー　コドモモ　アリマシタ。

ソレカラ　シバラクワ。ツキガ　ハ

〔參考〕

トンデ（飛んで）

トンデ（富んで）

○「とんで行くやうにも」を別々にいふ時、アクセントはトンデ

イク　ヨーニモとなる。

○「走つてゐるのは」と續けていふ時、イルノワのアクセントはあ

まり高くならない。

〔參考〕

ユー（云ふ・結ふ・夕）

ユー（勇）

○「お月樣が走つてゐるのだよ」は稍早目にいふがよい。

○「ゐるのだよ」は下り調子にいふがよい。

シル。クモガ　ハシル、ト　タガイ

ニ　イーハッテ　イマシタ。

ミンナガ　ワイワイ　ユーノオ。ハ

ジメカラ　ダマッテ　キーテ　イタ

ヒトリノ　コドモガ　アリマシ

タ。ソノ　コドモワ。コノ　トキ

ミンナカラ　ハナレテ。マエノ　ホ

ーニ　アル　キノ　ソバエ　イキマ

シタ。ソーシテ。シバラク　エダゴ

シニ　ツキオ　ミテ　イマシタガ。

ココエ　キタマエ。クモガ　ハシ

ルカ　オツキサマガ　ハシルカ

ヨク　ワカルヨ、

〔參考〕

イタ（居た）

イタ（板）

ソノ（其の）

ソノ（園）

○「月が走る」「雲が走る」は挿入詞であるから地の文と區別してい

ふこと。

○「いひはってゐました」と續けていふ時、イマシタのアクセント

はあまり高くならない。

〔參考〕

キ（氣・黃）

キ（木・奇）

○「こゝへ來たまへ」からの言葉はその子供の落附いて觀察し、斷

言する態度と幾分か他の子供を敎へ導く氣持の表れるやうに、稍

ゆっくりといふ。

○「よくわかるよ」は上り調子にいふがよい。

ト　イーマシタ。。

ミンナ　キノ　ソバエ　キマシタ。。

ココニ　タッテ　オツキサマオ

エダノ　アイダカラ　ミタマエ、

ト　ソノ　コドモガ　イーマシタ。。

ソノ　トーリニ　ミンナガ　シテ

ミマシタ。。スルト　ツキワ　エダノ

アイダニ　ジットシテ　イマスガ。

クモワ　サッサト　ハシッテ　イキ

マス。。

ワカッタ　ワカッタ。ハシッテ

イルノワ　クモダ　クモダ、

ト　ミンナガ　イーマシタ。。。

〔參考〕

ダッテ（立つて）

タッテ（張ひて）

○「その通りに」を別々にいふ時、アクセントはソノ　トーリニとなる。

○「してみました」を別々にいふ時、アクセントはシテ　ミマシタとなる。

○「じっとしてゐますが」と續けていふ時、イマスガのアクセントはあまり高くならない。

○「さっさと」のアクセントはサッサトともいふ。

○「わかった、わかった」からの言葉は子供達が疑問を解決し、新しい發見をした喜びを表すやうに彈んだ調子でいふとよい。

一　指導概要

（一）教材

(1)　まづ全文を通讀させ、文の大體の筋をよみとらせる。これには新出文字や語句の意味を知らせ、十分に讀みを練習する。

(2)　次は文の探究に入り論爭の顚末を吟味して、どういふ問題が出て、どういふ論爭をしたか、これについてこの解決に導いて賢い子供の深い考を玩味考察せしめる。

イ、かげふみの樣子、

ロ、月が走るか、雲が走るか……（問題）

ハ、走るのは月だ。

ニ、走るのは雲だ。……（論爭）

ホ、だまつて聞いてゐた子供

枝ごしに月を見てゐる。

こゝへ來て見たまへ、すぐ解る。

ヘ、わかつた、走るのは雲だ。……（解決）

かやうに要點を吟味考察せしめる。

(3)　最後にこの子供のかしこい所、雲の走ることを立證した眞理發見の態度について考察討究せしめる。

イ、木の枝ごしに月を見てゐた。……（判斷）

ロ、こゝへ來て見たまへ　よくわかる（結論）

をいはずに、見方を教へてゐる。

ハ、わかつた　走るのは雲だ（各自に解決、論より證據）

かういふ所をよく討究玩味する。

(4) 朗讀は考へ深い子供の言葉は稍ゆつくり讀み、論爭の言葉は少し速いがよい。よみを十分に指導する。

(5) 文字の收得、語句の理解運用については十分に練習を行ふ。叙述としては次の所は注意を要する。多少練習する必要があらう。

雲にはいつたかと思ふとすぐ出、出たかと思ふとすぐまたはいります。

とんで行くやうにも見えます。

たがひにいひはつてゐます。

わい〳〵いふのを、

三　參考

原據は佛蘭西第十七世紀の筆者ガサンヂ（P. Gassondi）七歳の時の逸話で、外國の讀本より採つたもの。ガサンヂが自分の主張に反對する子供達を、咄嗟の間に明確な立證により納得せしめたその智を物語る話である。

八　ヲヂサン　ノ　ウチ

一　要旨

正ちやんといふ作者が、川向ふの村のをぢさんの家へおはぎをもつて行つたことを讀みとらせ、靜かなしかも平和な農家の生活と老祖母と孫との濃やかな愛情を感得させる。

二　指導觀

（一）親類へ行くのは子供の生活のたのしさの一つである。母親の手づくりのおはぎをもつていそ〳〵と秋の小道を行く少年「をぢさんのうちでは、庭一ぱいもみがほしてあつた。」晴れた秋空の色と一ぱいに降りかゝる明るい日ざしが思はれる。若いものは皆畑に出て働いて家に居るのは年寄である。森閑とした家の緣におばあさんが獨り針をもつてゐる。靜かである。

（二）「正チヤン、ヨク來タネ。」「ソレハアリガタウ。」「ユデタ栗ヲオボンニ一パイ持ッテ來テ下サイマシタ。」おばあさんのうれしい心持と、孫への愛情が遺憾なく表現されてゐる。

（三）足のふみばもない程、庭一ぱいにほした籾、日當りのよい緣側、茹栗、本當になつかしい秋、豐穣な農家の風景である。うちの人は皆留守で、おばあさんだけが留守居、正ちやんの「オバアサン、今日ハ。」といふ聲がいかにも大きく響き、鷄のかきちらす籾のずれ合ふかすかな音、「ホウ、ホウ。」といふおばあさんの聲、鷄より先に逃げる雀

の羽音まで、靜かさの中では聞かれるのである。

（四）都會の子供には體驗は少いであらうが、日本人に流れてゐる傳統には、かゝる情景、雰圍氣に特殊の愛着と親しみをもつてゐるものである。こんな感情を引き出して育て培ふことに特に氣をつけなければならない。忙しい秋の農家の有樣は子供と年よりの對照によつて、遺憾なく表現されてゐる。感得さすべき部面である。

（五）本課に取扱つてあるをぢさんの家、こんな農家が日本農村家庭の典型的なものであらう。

三　朗讀

朗讀上の注意

○この課の朗讀上、特に注意する點は、子供と老人との言葉の對照を、特に速度によつて表すことである。

○「ウチ」は平板式にもいふ。

○「オ作リニナッタ」を別々にいふ時、アクセントはオツクリニナッタとなる。

本文

ハチ°°オジサンノ　ウチ°°

カワヒトツ　コエテ　ムコーノ　ムラニ　オジサンノ　ウチガ　アリマス°°キノー　ワタクシワ。オカーサンノ　オツクリニ　ナッタ　オハギ

オ　モッテ。オツカイニ　イキマシタ°°°

オジサンノ　ウチデワ　ニワ　イッパイ　モミガ　ホシテ　アッテ。アシノ　フミバモ　ナイ　クライデシタ°°ウチノ　ヒトワ　ミンナ　ルスデ。オバーサン　ダケガ　ヒアタリノ　ヨイ　エンガワデ　ツギモノオシテ　イラッシャイマシタ°°°

オバーサンワ　ミミガ　トーイノデ。ワタクシガ　オーキナ　コエデ。

オバーサン。コンニチワ、ト　ユート。フリカエッテ。

八　ヲヂサン　ノ　ウチ

○「庭一パイ」を別々にいふ時、アクセントはニワ　イッパイとなる。

〔參考〕

モミ（籾）
モミ（樅・紅絹）

イッパイ（充滿）
イッパイ（一杯）

○次の言葉を夫々續けていふ時、下の語のアクセントはあまり高くならない。

「ホシテ　アッテ」
「ナイ　クラキデシタ」

○「遠イ」はトーイである。トオイーと誤る場合が多いから注意したい。

オー、マサチャンカ。ヨク キタネ、

ト オッシャイマシタ。。

ワタクシガ オハギノ ツツミオ オワタシスルト。オバーサンワ。

ソレワ アリガトー、

ト イッテ オウケトリニ ナリマシタ。。ソーシテ。ユデタ クリオ オボンニ イッパイ モッテキテ クダサイマシタ。。。

ニワトリガ キテ。ムシロニ ホシテ アル モミオ トキドキ カキチラシマス。。オバーサンガ。ホー

○「オウ、正チャンカ」の終は下り調子。

〔參考〕

ムシロ（蓆）

ムシロ（寧ろ）

○次の言葉を夫々續けていふ時、下の語のアクセントはあまり高くならない。

「ホシテ アル」

ホー、ト イッテ オオイニ ナリマスト。ニワトリヨリ サキニ スズメガ ニゲテ イキマス。。

モー カエリマス、

ト ワタクシガ イーマスト。オバーサンワ。

キョーワ コンナニ モミガ ホシテ アルカラ。オジサンモ オバサンモ ハヤク カエルヨ。モット アソンデ オイデ、

ト イッテ オトメニ ナリマシタ。。シカシ。ワタクシワ オソクナルト オモッテ。イタダイタ ク

○「ニゲテ イキマス」「オ追ヒニナリマスト」を別々にいふ時、アクセントはオオイニナリマストとなる。

○「早クカヘルヨ」の終は上り調子。

○「オ止メニナリマシタ」を別々にいふ時、アクセントはオトメニナリマシタとなる。

○「オソクナルト」を別々にいふ時、アクセントはオソク ナルトとなる。

リオ　モッテ　カエリマシタ。。。

■ 指導概要

（一）教　材

(1) 本教材は對話をもとにして取扱ひ、祖母さん。孫への愛情と田園の情景にひたらせ、親戚間の有難味や、靜閑平和な農村が日本の力强い基礎である事迄確認させる底に導き、田園を憧憬する感情の養成にも心掛けなければならない。

(2) 正ちやんは心掛のよい子供であることを知らせ、お使に行くことは善行であることを感知させ、實行を促さなければならない。

(3) 新出文字、足、包、渡シ、栗、逃ゲの五字が出してある。讀替文字はない。足ノフミバ、オハギノ包ヲオ渡シスル、ユデタ栗、ニハトリヨリ先ニスヾメガ逃ゲテ行キマス。等の語句中の文字として重要であるから形式的方面の收得練磨とともに文章指導の中心文字として取扱つて行くことに心掛けなければならない。

(4) 「庭一バイモミガホシテアツテ、足ノフミバモナイクラキデシタ。」秋の明るい晴れた日、とりいれに忙しい頃、靜かで暖い日光がふり注いでゐる。これらの文中の生きた語句をとらへて、農村の豐穣と平和と靜かさを了得させなければならない。

(5) 「耳ガ遠イノデ……フリカヘッテ……」祖母さんの高齢と純朴さを感知させ、「ユデタ栗ヲオボンニ一バイ……」山家らしい質素ながら誠のこもつたもてなしであることを感じさせなければならない。祖母の孫に

對する愛情には家の永遠の發展や人類の永遠の相を意識しない迄も、自然に發露してゐる情愛を汲み取り得るであらう。

(6) 「モウカヘリマス。」短い秋の日である。もう庭の隅には、日かげがうすら寒く出て來たらうか。それまでうつとりと和やかな日ざしにひたつてゐたのから我にかへる。「オソクナルト思ッテ、」里心とでもいへやうか。これ等の言葉もたゞ一つの表面的な解釋に終らないで、十分意味深く探索して行きたいものである。

(7) 緩方への模範文として取扱ふ。

（二）挿　畫

四十九頁の挿畫は、日あたりのよいえんがはで、つぎ物をしていらつしやるお祖母さんに、大きなこゑで親しく呼びかけて、おはぎの包をお渡ししてゐるところ。庭には足のふみばもない位籾がほしてある。鷄がむしろの籾をかき散らす、むしろの處々に小石が置いてある。風にむしろがふきまくられないやうにした重しである。つくろはない障子の破れも、農家らしく少しも貧窮は感じさせない。むしろの重しの小石と對照して面白い。

（三）準　備

掛圖。

九山がら

一　要旨

山で山雀が首を動かしながら松の小枝から小枝へと飛廻る可憐輕快な動作を機織に聯想する心持を、七七調の詩を通して感得させ、小禽に對する情愛を養ひ、詩的表現の面白さに觸れさせる。

二　指導觀

（一）山雀は鳴禽類に屬し、山林中に棲む。性質怜悧で、樣々の藝を覺え、之を演ずる。昔から山雀の藝當といつてもてはやされる。かうした事が此の教材に一つの響きを與へてゐる。

山で山雀の動作を見てゐると、瞬間もじつとしてはゐない、絶えず首を前後に動かしながら蟲を捕り、木を啄き、輕快に枝から枝に飛移る。そして「ちいからから」「ちいちいからから」と、可愛い聲で鳴く。何時までも何時までも見てゐると、其の輕快な動作から巧な機織へと聯想が走る。一日中精を出して織つてゐる。織續ける。自然に「とんとんからり」といふ機織の音の聯想を起す。かうした聯想から山がらの輕快可憐な動作を機織と見えたのが此の詩である。

（二）此の詩の持つ心持は山雀の可愛さである。「けふも、朝から、とん〳〵からり。」「とんで移つて、とん〳〵からり。」「日には八反、とん〳〵からり。」かうしてよく働く所は誠に可愛い、而も「ちいから〳〵」「ちい〳〵から

から」といふ鳴聲をきく。此の心持から構想を見ると、第一節は、山がらは働きもので今日も朝から機を織る。第二節は、枝から枝へ飛んで移つていそがしく機を織る。第三節は、朝からの織高は八反、隨分よく織るものだといふのである。

（三）此の詩の調子は、七五七七、七七七七、七七七七となつてゐるが、大體は七七調と見て差支なからう。何れの節も輕快な感じがあつて、山雀の動作を表はすによい。

（四）三節共「とん〳〵からり。」といふ擬聲語を以て結んでゐる。之れは山雀の動作を機織に見立てた上からの聯想で、山雀の鳴聲ではない。勿論之れ等の鳴聲が其の動作と調和して機織を聯想させるのであるが、山雀の動作を機織と見立てた結果、機を織る音を聯想してかくしたものであると思ふ。

三　朗讀

本文

ク。。ヤマガラ。。

ヤマ|デ　ハタ|オ|ル

ヤマガラワ。

九山がら

朗讀上の注意

○全體をなるべくゆっくりリズミカルに讀むとよい。

○「はたおる」と續けてふ時、|オルのアクセントはあまり高くならない。

〔參考〕

ハタ（傍）　|アサ（朝）

キョーモ　アサカラ
トントン　カラリ。。

マツノ　コエダオ
エダカラ　エダエ。
トンデ　ウツッテ
トントン　カラリ。。

アサニ　イッタン
ツズイテ　ニタン。
ヒニワ　ハッタン
トントン　カラリ。。

ハタ（機・旗）　アサ（朝）
ハタ（畑・將）
オル（居る）
オル（折る・織る）

○「とん〳〵からり」はトントンカラリ或はトントンカラリでもよい。

〔參考〕
マツ（松・待つ）

○「松の小枝を枝から枝へ」と飛び移る敏速な動作もリズムにのせてゆっくり表現するがよい。

〔參考〕
イッタン（一反）
イッタン（一端・一旦）
イッタン（一旦）

○「日」は陽光の意を表す時には平板式にいふが、或一日といふ意を表す時にはヒといふことが多い。

指導概要

（一）教材

(1) 日常山雀を觀てゐる子供はよいが、然らざる地方の子供にはせめて鳥籠の山雀だけでも直觀させ度い。それさへ出來ぬ場合は標本や挿畫から想像させるがよい。

(2) 又此の詩を味はふ上からは實際の機織を觀察させなければならない。而も其の機織は工場の機織でなく、手機でなければ此の詩の妙味には合致しない。

(3) 通讀の後各節の語句の意味を授け、更に讀みを深めて總合的に感想を發表させるがよい。

はたおる＝機で布帛を織る。

けふも＝今日ものもに注意する。今日もでよく精出すことを表はしてゐる。

とん〳〵からり＝とん〳〵は箴で絣絲を押詰める音、からりは杼を通す音、故にとん〳〵からりは機を織る音。

松の小枝＝松の小さい枝。枝から枝へは其の小さい枝から小さへ枝への意。

朝に一反＝朝のうちに一反織るといふこと。

つづいて二反＝それからつづいて二反織るといふこと。

日には八反＝かうして一日には合計八反織るといふこと。

感想としては「山がらはよく働いてかはいゝ」となれば結構である。

(4) 朗讀を指導しながら、反の持つ心持を充分に味はしめる。

第一節は「けふも朝から」を元として「とん〳〵からり」を味はひ、山雀が今日も朝から精を出してよく働く

首を振り動かして輕快な動作を想はせ、
第二節は「枝から枝へ」を元として「とん〳〵からり」を味はひ、飛廻りながらも精を出してよく働く輕快な動作を想はせ、
第三節は「日には八反」を元として「とん〳〵からり」を味はひ、かうして日に八反を織るといふ輕快な動作を想はせるがよい。

(5) 新出文字は移、反の二字であまり困難はない。「日には」の使用法は充分練習するがよい。

(二) 挿畫
秋の山の景、赤松は蔦が絡つて紅葉してゐる。二羽の山雀が首を前後に動かして小枝を啄いてゐる。機を織つてゐる。

(三) 準備
掛圖、實物又は標本。

十　山がらの思出

一　要旨
よくなれて、作者の手からゑをたべる程になつてゐた山雀が、ある晩、鼠に足の指をくひ切られ、きずを見てやらうと思つて、かごの戸をあけると、うらの山へとんでいつたその間の、山雀に對する愛着憐憫追憶の心持を讀取らせ、且つ小鳥に對する愛情を養ふ。

二　指導觀
(一) 山雀に對する思出を書いた文であつて、その思出は、山雀に對する愛着憐憫追憶の心持が中心となつてゐることを讀取らせけなればならない。
(二) 文は、大きく二つに區分せられてゐて、最初から「うらの山へとんで行つてしまひました。」までは、大そうよくなれてゐた山雀が、ある晩、ねずみに足の指をくひ切られ、きずを見てやらうと思つて、かごの戸をあけると、うらの山へとんで行つたまでの顚末が書かれてゐる。そしてこれまでの書きぶりは、極めて最近のやうに感銘的に書かれてゐる。
(三) 「これは、私が七つの年のことでした。」に至つて、初めて二年前の出來事であり、これまでの叙述が、その思出であつたことを明らかにしてある。

思出の文章の一般的な形式であつて、この文章の機構をよく了解させることが大切である。

（四）作者の心情を捉へさせ、山雀に對する憐憫情愛の精神を把へさせることが大切である。

「今でも、山がらの聲を聞くと、まだあれが生きてゐるだらうか、足のきずはどうしたらうかと思はないことはありません。」といふ最後の言葉は、その最も高潮した精神の結晶と見てよいであらう。

三　朗讀

本文

ジュー。。ヤマガラノ　オモイデ。。

ワタクシノ　ウチニ　ヤマガラガ

イチワ　カッテ　アリマ・シタ。。タイ

ソー　ヨク　ナレテ。ワタクシノ

テカラ　エオ　タベル　ホドニ　ナ

ッテ　イマ・シタ。。。

朗讀上の注意

〔參考〕

カッテ（飼って）　カッテ（買って・刈って）

エ（餌・繪）　エ（柄）

○次の言葉をそれ〴〵續けていふ時、下の語のアクセントはあまり高くならない。

「かって　ありました」

「なって　ゐました」

ソレガ　カワイソーニ。アル　バン

ネズミニ　アシノ　ユビオ　クイ

キラレマ・シタ。。

ドンナニカ　ナイタノデショーガ。

ウチノ　モノワ　アサマデ　シラズ

ニ　イマ・シタ。。。

キズオ　ミテ　ヤロート　オモッテ。

ワタクシガ　カゴノ　トオ　アケマ

・スト。ヤマガラワ　トビダ・シテ。タ

ケガキノ　ウエニ　トマッテ。ソレ

カラ。ウラノ　ヤマエ　トンデ　イ

ッテ　シマイマ・シタ。。。

コレワ　ワタクシガ　ナナツノ　ト

○「うちのものは」を別々にいふ時アクセントはウチノ　モノワとなる。

○「知らずにゐました」を別々にいふ時、アクセントはシラズニイマ・シタとなる。

○「見てやらうと」と續けていふ時、ヤロートのアクセントはあまり高くならない。

〔參考〕

ト（戸）

ト（砥・途）

○「竹がき」はタケガキともいふ。

○「とんで行って」は續けてトンデイッテともいふ。

シノ　コトデシタ。。。イマデモ。ヤ
マガラノ　コエオ　キクト。マダ
アレガ　イキテ　イルダローカ。ア
シノ　キズワ　ドーシタローカト
オモワナイ　コトワ　アリマセン。。。

○「思はないことは」と續けていふ時、コトワのアクセントはあまり高くならない。

■指導概要

（一）教材

(1) 純情の文であつて、作者のそのやさしい思ひやりの心持を捉へさせることが大切である。

(2) そのために、作者がどんな子で、山雀に對してどんな心持を持つてゐたかなど、作者と山雀との關係などをしらべさせることが大切である。

(3) 新出文字は聲の一字、讀替文字は、羽、生、きの二字。

(4) 注意すべき語句は次の如きものであらう。「大そうよくなれて、私の手からゑをたべるほどになつてゐました。」「どんなにかないたのでせうが、うちのものは、朝まで知らずにゐました。」「きずを見てやらうと思つて、私がかごの戸をあけますと、山がらはとび出して、竹がきの上に止つて、それから、うらの山へとんで行つてしまひました。」「今でも、山がらの聲を聞くと、またあれが生きてゐるだらうか、足のきずはどうしたらうかと

思はないことはありません。」

(5) 綴方と連絡して、思出の文の書方を會得させ、且つさうした方面に取材の範圍を擴大させることが大切である

(6) 前課「山がら」と聯關して、山がらのかはいゝ姿を描かせることが大切である。

十一　大江山

一　要旨

源頼光がしゆてん童子を退治したといふ傳說童話「大江山」を讀むことによつて、頼光一行の剛毅、武勇、童子の獰猛さを知らせて、物語の面白さを味はせ、尙武の國民性陶冶に資し、かねて長文の讀解力を養ふ。

二　指導觀

（一）本課は史的物語教材で、全課十六頁に亘る長文、形式的に見ると、此の學年に於ては稍々困難を思はせるが、內容は室町時代から發達した勸善懲惡、尙武的思想をもつた代表的傳說で、可かり人口に膾炙してゐるから、左程理解に困難はない筈である。その上、美しい挿畫が三つも入れられて、その重要な場面を出してあるし、

（イ）暴虐なるものゝ膺懲、

（ロ）强大なるものゝ打倒、

（ハ）世の人々を救ふこと、

（ニ）智謀の優れたる點、
（ホ）冒險でしかも勇敢なること、
（ヘ）勅命による正義の討伐であること、
（ト）豫期しない援助の出現すること、
これらの物語の內容が兒童の心理にぴつたりと合致して興味を唆り、一層この童話を價値づけてある。

（二）本文は酒呑童子が大江山にあつて暴虐を働らいた事に起筆して、都の混亂。勅命を奉じて賴光の鬼退治。大江山の樣子。不思議の酒を得る。鬼に掠はれた女にあつて案內をうける。鬼の屋敷に宿を乞ふ。酒盛最中に酒呑童子に奇酒をのませ、醉ひ倒れさせて退治する。凱旋。の筋でかゝれてゐるが、全課を通じて中心となつてゐるものは賴光の武勇である。

（三）（イ）酒呑童子の暴虐、
物をぬすんだり、女や子どもをさらつたりしました。
（ロ）都の混亂
都は大さわぎです。
（ハ）賴光の勅命を奉じての鬼退治
五人の强いけらいをつれ、山伏のすがたをして出かけました。
（ニ）大江山の樣子、
ものすごい山、びくともせず、けはしい山道、深い谷、だん〳〵おくへ、大きな岩、
（ホ）不思議な酒を得る（神助か）
鬼がのめば弱くなり、人間がのめば强くなる、一つのつぼ、
（ヘ）若い女の案內、手助、
一人の若い女がしく〳〵と泣きながらせんたくをして、鬼にさらはれて、鬼をうち取つて、先に立つて道あんない。
（ト）賴光の智謀と勇敢、
道にまよつて困つてゐます。一晩おとめ下さい。私もよい酒を持つてゐます。一つめしあがつて下さい、持つて來たよろひやかぶとを取出して身じたく。しゆてんどうじを呼びおこし。賴光のいきほひにおそれて。鬼ども……みんな殺されてしまひました。
（四）凱旋
しゆてんどうじの……めでたく都へかへりました。

二　朗讀

頁	本文	朗讀上の注意
56	ジューイチ。。オーエヤマ。。	
	オーエヤマニ　シュテンドージト	
十一	大　江　山	

ユー　オニガ　イテ。トキドキ　ミ
ヤコニ　デテ　キテ。モノオ　ヌ
スンダリ　オンナヤ　コドモオ　サ
ラッタリ　シマシタ。。。
ミヤコワ　オーサワギデス。。。
テンシサマワ　タイソー　ゴシンパ
イニ　ナッテ。ライコート　ユー
エライ　タイショーニ。シュテンド
ージオ　タイジル　ヨーニ　オイー
ツケニ　ナリマシタ。。ソコデ　ライ
コーワ　ゴニンノ　ツヨイ　ケライ
オ　ツレ。ヤマブシノ　スガタオ
シテ　デカケマシタ。。。

○次の言葉をそれ〴〵續けていふ時、下の語のアクセントはあまり高くならない。

「出て　來ては」
「さらったり　しました」

○次の言葉をそれ〴〵別々にいふ時、アクセントは下記のやうになる。

「ごしんばいに　なって」　ゴシンパイニ　ナッテ
「たいぢる　やうに」　タイジル　ヨーニ
「おいひつけに　なりました」　オイーツケニ　ナリマシタ

オーエヤマニ　キテミルト。オニノ
スム　トコロダケ　アッテ。タイ
ボクガ　コンモリト　オイシゲリ。
ヒルデモ　ウスグラクテ。ホントー
ニ　モノスゴイ　ヤマデシタ。。シカ
シ　ミンナ　ツヨイ　ヒトタチデス。
カラ。ビクトモ　セズ。ケワシー
ヤマミチオ　ノボッタリ。フカイ
タニオ　ワタッタリ　シテ。ダンダ
ン　オクエ　ススンデ　イキマシ
タ。。。
シバラク　イクト。オーキナ　イワ
ガ　アッテ。ソノ　ソバニ　ヒトリ

○「來て見ると」を別々にいふ時、アクセントはキテ　ミルトである。

〔參考〕
ヒル（蛭）
ヒル（蛭・干る）

○「進んで行きました」を別々にいふ時、アクセントはススンデ　イキマシタとなる。

ノ　オジーサンガ　タッテ　イマシタ。ソーシテ。

アナタワ　ライコーサマデワ　アリマセンカ。ワタクシワ。キョーアナタガ　ココニ　オイデニ　ナルト　キーテ。オマチシテ　イタノデス。コノ　サケワ。オニガノメバ　ヨワク　ナリ　ニンゲンガ　ノメバ　ツヨク　ナル　フシギナ　サケデス。コレオ　モッテ　イッテ。オニオ　タイジテ　クダサイ、

ト　イッテ。ヒトツノ　ツボオ　ワ

○「立ってゐました」と續けていふ時、イマシタのアクセントはあまり高くならない。

○おぢいさんの言葉は、すべてゆつくりといふがよい。

○「ありませんか」の終は上り調子。

○「おいでになる」を別々にいふ時、アクセントはオイデニ　ナルとなる。

○次の言葉をそれ〴〵續けていふ時、下の語のアクセントはあまり高くならない。

「弱く　なり」
「强く　なる」
〔參考〕
サケ（酒）
サケ（鮭）

○「たいぢて下さい」を別々にいふ時、アクセントはタイジテ　クダサイとなる。

タシマシタ。ライコーワ　ヨロコンデ。ソノ　ツボオ　ウケトリマシタ。

モット　ススンデ　イキマスト。コンドワ。タニガワデ　ヒトリノ　ワカイ　オンナガ。シクシクト　ナキナガラ　センタクオ　シテ　イマシタ。ライコーガ　フシギニ　オモッテ。

ナゼ　ナイテ　イマスカ、

ト　タズネマスト。オンナワ。

ワタクシワ　ミヤコノ　モノデスガ。オニニ　サラワレテ　ココニ

○「進んで　行きますと」を別々にいふ時、アクセントはススンデ　イキマストとなる。

○次の言葉をそれ〴〵別々にいふ時、アクセントは下記のやうになる。

「ふしぎに　思って」　フシギニ　オモッテ
「泣いて　ゐますか」　ナイテ　イマスカ

○こゝの女の言葉は悲しみを表すやう沈んだ調子で弱く讀む。

キマ|シタ。。イッ　コロサレルカ
ワカリマセン。。ソレガ　カナ|シ
クテ　ナイテ　イル|ノデス、
ト　イーマ|シタ。。ライコーワ。
ワタクシワ　テ|ンシサマノ　オー
セオ　ウ|ケテ。ソノ　オニ|オ　タ
イジニ　キマ|シタ。。オニノ　イル
トコロワ　ド|コデスカ。。アンナ
イシテ　クダ|サイ、
ト　イーマ|スト。オンナワ　タ|イソ
ー　ヨロコンデ。
マー　ナント　ユー　アリガタイ
コト|デショー。。ドーゾ　オニ|オ

○「たいちに　來ました」を別々にいふ時、アクセントはタイジニキマ|シタとなる。

○「どこですか」の終りは上り調子にいふ。

○こゝの女の言葉は喜びの心を表すやう、稍速くいふのがよい。

ウチトッテ。ワタ|クシタチオ
オタスケ　クダ|サイ、
ト　イッテ　サキニ　タ|ッテ　ミチ|
アンナイオ　シマ|シタ。。。
ヤガテ　ムコーニ　オ|ーキナ　テツノ
モン|ガ　ミエマ|シタ。。ソノ　ソ|バ
ニ。オニノ　バンペーガ　テツノ
ボーオ　モ|ッテ　タ|ッテ　イマ|シ
タ。。。ライコーワ　ソコエ　イッテ。
ワタ|クシタチワ　ヤマブシデスガ。
ミチニ　マヨ|ッテ　コマ|ッテ
イマ|ス。。ドーゾ　ヒト|バン　オ
トメクダ|サイ、

○「お助け下さい」を別々にいふ時、アクセントはオタスケ　クダ|サイとなる。

〔參考〕
ボー（棒）　ボ|ー（坊）

○「立ってゐました」と續けていふ時、イマ|シタのアクセントはあまり高くならない。

○顯光の言葉は大將としての落附きを示すやう、ゆつくりといふのがよい。

○「困ってゐます」と續けていふ時、イマ|スのアクセントはあまり高くならない。

ト　イーマシタ。。

オニノ　バンペーワ　イチド　オクエ　ハイリマシタガ。マタ　デテキテ　ライコータチオ　シテンドージノ　イル　リッパナ　ゴテンエツレテ　イキマシタ。。。

シテンドージワ。ケライノ　オニドモオ　オーゼー　アツメテ。サカモリオ　シテ　イマシタ。。ライコータチガ　ハイッテ　クルノオ　ミルト。オーキナ　メオ　ムイテ　ギョロリト　ニラミマシタガ。

ヤマブシタチ。トメテ　アゲヨー。

○「つれて　行きました」を別々にいふ時、アクセントはツレテ　イキマシタとなる。

○矢の言葉をそれ〴〵續けていふ時、下の語のアクセントはあまり高くならない。

「はいって　來るのを」

「休むが　よい」

「ありがたう　ございます」

ユックリ　ヤスムガ　ヨイ、

ト　イーマシタ。。ライコーワ。

アリガトー　ゴザイマス。。ワタクシドモワ　マイニチ　ノヤ　ヤマニバカリ　ネテ　イマシタガ。コンヤワ　オカゲデ　ユックリ　ヤスマレマス。。チョード　オサカモリノ　サイチューノ　ヨーデスガ。ワタクシモ　ヨイ　サケオ　モッテ　イマス。。ヒトツ　メシアガッテ　クダサイ、

ト　イッテ。オヂーサンカラ　モラッタ　サケオ　トリダシマシタ。。

〔參考〕

モッテ（持って）　モッテ（盛って）

○「持ってゐます」と續けていふ時、イマスのアクセントはあまり高くならない。

○「めしあがって　下さい」を別々にいふ時、アクセントはメシアガッテ　クダサイとなる。

シュテンドージワ　ヒトクチ　ノンデ　ミルト。コレマデ　ノンダ　コトモ　ナイ　ヨーナ　オイシー　サケデスカラ。

コレワ　ンマイ。。コレワ　ヨイサケダ、

ト　イッテ　ガブガブ　ノミマシタ。。。ホカノ　オニドモモ　ツギツギト　タクサン　ノミマシタ。。ソノウチニ　フシギナ　サケノ　キキメガ　アラワレテ　シュテンドージワ　ダンダン　ゲンキガ　ナクナリ。シマイニワ　グッタリト　ネテシマイマシタ。。ホカノ　オニドモモ。アスコエ　ニヒキ　ココエ　サンビキト。ゴロゴロ　タオレテシマイマシタ。。。

コノ　ヨースオ　ミタ　ライコータチワ。モッテキタ　ヨロイヤ　カブトオ　トリダシテ。ミジタクオシマシタ。。

ライコーワ　シュテンドージオ　ヨビオコシ。カタナオ　ヌイテ。エイト　イッセー　ソノ　クビオ　キリオトシマシタ。。トコロガ。クビワ　トビアガッテ。クチカラ　ヒオ　ハキ

○次の言葉をそれ〳〵續けていふ時、下の語のアクセントはあまり高くならない。

「のんで　みると」
「のんだ　ことも」
「ない　やうな」

○「がぶ〳〵」はガブガブとはいはない。

○しゅてんどうじを始め鬼共が酒をのんだために次第に元氣がなくなる所は、稍ゆっくりと聲を弱く讀む。

○「ねて　しまひました」を別々にいふ時、アクセントはネテ　シマイマシタとなる。

○「ごろ〳〵」はゴロゴロとはいはない。

○「たふれてしまひました」と續けていふ時、シマイマシタのアクセントはあまり高くならない。

○頼光達の活躍する所はあまり間をおかず、聲も强く讀むと、切迫した情景が表れてよい。

○「えい」といふ掛聲は力を入れる所であるから、エーとはいはないで、特にイを發音しなければいけない。

〔參考〕
ヒ（火・非・比・妃）
ヒ（日・碑）

ナガラ　ライコーノ　アタマニ　カ
ミツコート　シマシタ。ケレドモ。
ライコーノ　イキオイニ　オソレテ。
ソノママ　オチテ　シマイマシタ。
コノ　サワギニ。ホカノ　オニドモ
ガ　メオ　サマシテ　ムカッテ　キ
マシタガ。ライコータチ　ロクニン
ニ　ミンナ　コロサレテ　シマイマ
シタ。

ソコデ　ライコーワ。シュテンドー
ジノ　オーキナ　クビオ　ケライニ
カツガセ。サラワレテキタ　オン
ナヤ　コドモタチオ　ツレテ。メデ

○「落ちて　しまひました」と續けていふ時、シマイマシタのアクセントはあまり高くならない。

○次の言葉をそれ〴〵別々にいふ時、アクセントは下記のやうになる。

「向かって　來ました」ムカッテ　キマシタ
「殺されて　しまひました」コロサレテ　シマイマシタ

タク　ミヤコエ　カエリマシタ。

指導概要

(一) 教材

(1) この教材は十六頁に亘る長篇であり、內容に面白味もあるから、十分に讀むやうに修練するがよい。この學習には數時間を要するのであるから、時間配當を適當に考へて、文字、語句、文章、文段、文意の各方面に亘つて、形式的方面の修練にも十分に意を用ふることが大切である。

(2) 新出文字としては、江、鬼、壹、谷、進んで、岩、持ち、酒、弱く、喜こんで、尋ね、殺され、鐵、番、休む野、元、身じたく、拔く、の十九字、讀替文字に子、木、生ひ、外の四字、注意すべき讀みに時々、山道、上つたり、一人、今度、谷川、一晩、酒もり、毎日、今夜、次々、外、等があるが相當に多いから數時間に分けて、讀み方、意味、筆順等指導して行かなければならない。讀替文字は必ず既習の讀み方を復習して双方をいろ〳〵に使はせて練習させたい。こんな內容の面白い物語文等の取扱ひに際しては教師兒童ともに內容の面白さに眩惑されて、形式方面を輕視したがるものである。それは却つて內容を深める所以でない事に十分の誠心を要するのである。形式の深究こそは聽て內容の深究であることを忘れてはならない。

(3) 語句では、大さわぎ。大さうどしんばいに。鬼の住む所だけあつて。こんもりと。びくともせず。それがかなしくて。やがて。一つめしあがつて。がぶ〳〵のみました。酒のきゝめ。あすこへ二ひきこゝへ三びき。火をはきながら、いきほひにおそれて、めでたく。等をなるべく具體的に文に即して指導し、短文練習等によつて

十一　大　江　山

語句の使用法にもなれさせるがよい。

(4) 文章指導にあたつては全文の文意をとらへ、それ〴〵の個文が、全體の筋を、或は思想を、如何によく表現してゐるかをも感得的に指導していきたいものである。

「都は大さわぎです。」酒呑童子の暴虐を如何にも簡潔に表現して憾みがない。「天子様は大そうごしんぱいになつて、」叡慮を惱ませ給ふ姿が前の句章ではつきり浮んで來るのである。

「えらいたいしやうに。」たのもしい感じである。「鬼の住む所だけあつて」大江山のすごい恐ろしさが身にしみてくる。「一つのつぼ、」この小さな一つのつぼが靈力を發揮するのである。

「しく〳〵と。」鬼の暴虐がこの一語によく現れてゐる。「まあ、何といふありがたいことでせう。」無邊の皇恩とそれに浴する感激。「山伏たち、とめてあげよう。」頭らしい横柄さ。「がぶ〳〵……次々と、」奇酒に醉ふ鬼共のいぢきたない樣子。「頼光のいきほひにおそれて。」頼光の勇武、つまりは皇威におそてである。「めでたく都へ、」皇化あまねき相である。

(5) 不思議な酒を得たこと、若い女の案内者を得たことなど、皆豫期しない援助の出現であるが、正義、勅命を奉じて而も世の人々を救はんとする心には常に神明の御加護のあることを感ぜしめる樣指導に際して心すべきである。

(二) 挿　畫

(1) 六十一頁、谷川で洗濯してゐる一人の若い女、このものすごい大江山におよそ不釣合である。頭につけてゐるのは合子兜巾で金剛杖を持ち、腰に太刀をはいてゐる山伏姿をよく觀察させる。

(2) 六十七頁、酒盛をしてゐる酒呑童子の恐ろしい形相、人間より大きな鬼であることに注意させるがよい。

(3) 七十一頁、凱旋の光景、酒呑童子の大きな首を家來にかつがせてゐる。家來は卜部季武、坂田金時、碓井貞光渡邊綱、扇を右手にしてつき添つてゐるのは客分の藤原保昌、先頭に扇をひろげて鍬形の兜を戴いて悠々と進んでゐるのが頼光である。後の姫は救はれた池田中納言の姫君であらう。

(三) 準　備

讀本、掛圖。

三　參　考

原據　お伽草子中の「酒顚童子」より童話化したもの。此の話は武勇傳說であつて歴史とは何等關係はない室町時代に發生してもてはやされたものらしい。

十二　鬼ごっこ

一　要旨

子供の生活的な運動であり遊戯である鬼ごつこを歌つた詩に讀み親しませ、元氣快活の心情に共鳴共感させ、愉悅を味はせる。

二　指導觀

（一）教材の內容は子供の生活、鬼ごつこそのまゝであるから、文字語句に習熟させ詩のリズムを味はせると、此の詩の心持に共鳴共感させることが出來るので、さまで困難なものではない。

（二）唯此の詩は表現樣式に稍複雜なものがある。鬼ごつこそのものは極めて普通に行はれる鬼ごつこであるが、四節から成る此の詩が各節毎に觀方を異にして變化させてゐるのである。即ち第一節と第三節とは客觀的描寫であり、第二節と第四節とは主觀的表現である。而も第一節第二節は逃げ手を歌ひ、第三節と第四節は鬼を歌つてゐる。指導に當つては此の點を明瞭に讀取らせなくてはならない。

（三）言葉の上で注意すべきは

「じやんけんぽんよ、あいこでしよ」これは鬼きめの場面で、鬼ごつこの準備であり序曲である。調子のよい此の言葉で子供達が言ひ放つてゐる。「あひこ」になれば「じやんけん」を繰返す。何回繰返してゐる中に鬼がきまる。逃げ

手が「ばら〳〵と」かけ出し、逃出し、逃まはるのである。それが左へ右へ上手に逃げる。之を極めて平易に表現してゐる。

第二節と第四節には非常に力强い言葉を用ひてある。第一節第三節に比較して味はせるがよい。

「うつかりするな」「ゆだんをするな」「手早だ」「足早だ」「つかまるぞ」「逃けろ」「目にかけないぞ」「逃はないぞ」「逃けろ」

子供に新らしい言葉として次の言葉がある。

うつかり＝一寸とした油斷

ま一文字＝まつすぐに急速に

目にかけない＝かまはない、相手にしない。

三　朗讀

頁	本文	朗讀上の注意
72	ジューニ。オニゴッコ。 ジャンケンポンヨ。 十二　鬼ごっこ	○樂しさうな鬼ごつこの情景を想ひ浮べながら調子よく稍速く讀むがよい。

アイコデ　ショ。。

オニガ　キマッテ　バラバラト、

カケダシ　ニゲダシ　ニゲマワリ。

ヒダリエ　ミギエ　ニゲジョーズ。。。

ウッカリ　スルナ。

ユダンオ　スルナ。。

オニワ　テバヤダ　アシバヤダ。。

スグ　ネラワレテ　ツカマルゾ。。

ソレソレ　ニゲロ　ソレ　ニゲ

○「逃げまはり」は、ニゲマーリとならないやう　ワ　をはつきりと發音するがよい。

〔參考〕

スル（爲る）

スル（磨る・擦る・摺る・刷る）

ロ。。。

オニサン　ホントニ　オッカケジョーズ。。

マイチモンジニ　オイカケテ。

キューニ　ヨコムキ　ウシロムキ。

ツカマエジョーズ　オイジョーズ。。。

ツカレタ　モノヤ

ヨワッタ　モノワ。

メニ　カケナイゾ　オワナイゾ。。

十二　鬼ごっこ

○次の言葉をそれ〴〵續けていふ時、下の語のアクセントはあまり高くならない。

「つかれた　ものや」

「弱った　ものは」

「よい　もの」

「早い　もの」

ゲンキノ ヨイ モノ ハヤイ
モノ。
ヒダリエ ミギエ ソレ ニゲ
ロ。。。。

〔參考〕
ヨイ（善い）
ヨイ（酔ひ）
ヨイ（宵）

■ 指導概要

（一）教材

(1) 題目「鬼ごつこ」を板書して讀ませ、次に新出文字　ま一文字　横向　後向　を語として讀ませ、更に　文　横　後の讀みを授ける。

(2) 一二回通讀の後「うつかり」「ま一文字」「目にかけない。」の言葉の意味を確める。

(3) 更に通讀の後各節の表現樣式を吟味し、第一節と等三節とは鬼ごつこを見てゐるものが言つてゐること、第二節は逃げ手自身が、第四節は鬼自身がいつてゐることを確める。

(4) 次第に讀みを深めて各節の心持を味はせる。

第一節は見てゐる者が逃げ手の機敏な動作「かけ出し、逃出し、逃げまはり」に感心して「左へ、右へ、逃げじやうず」とほめたこと

第二節では逃げ手が、互に警戒し合ふ言葉であるから、「手早だ、足早だ」を中心として、「うつかり」「ゆだん」「それ〳〵」の關係を味はせ、

第三節は見てゐる者が鬼の手早足早に感心して「追つかけじやうず」「つかまへじやうず」「追ひじやうず」とほめてゐること、

第四節は鬼が「つかれたもの」「弱つたもの」に任俠的に「目にかけない」「追はない」で「元氣のよいもの」「早いもの」だけを追ふ元氣なことを味はせる。

(5) 此の詩の音律は大體七五調に表現されてゐる。此の活氣と力强さを充分に表はす樣に暗誦するまで讀ませて欲しい。

十三　いうびん

一　要旨

郵便ごつこの樂しい遊びの中に、郵便に關する簡單な知識を得させ、工夫創作のよろこび、親愛の情操を讀み取らせ且つ手紙文への誘導をはかりたい。

二　指導觀

（一）生活教材であつて、花子さんと雪子さんと花子さんの弟の三ちやんが、切手をこしらへ、はがきとふうとうをこしらへ、ポストをこしらへての實演である。したがつて、さうした氣持を讀み取らせることが大切である。即ち工夫創作のよろこび、實演のよろこび等である。

（二）文は(1)三人が切手や葉書、封筒、ポストなどをこしらへて、郵便ごつこの準備をしたこと、(2)それから花子さんと雪子さんが兩方に分かれてすわり、三ちやんがポストを眞中に置いて、愈々遊びにとりかゝつたこと、(3)配達の實情、(4)手紙の交換といふやうになつてゐる。そしてその間に、郵便物が交換されるまでに極めて簡單な順序と、普通郵便物に葉書と手紙の二種類があることなどが巧みに示されてゐる。

（三）「新年おめでたうございます。」は、新年のよろこびを端的にあらはしたものであつて、お互に讀み合ふ情景は明朗な新年の風景であらう、又、

「あしたから、學校が始まりますが、また一しよに行きませう。朝さそつて下さい。」

「お手紙ありがたうございます。きつとおさそひしますから、三ちやんと一しよに待つてゐて下さい。」は、二人の友情の細やかさを示したもので、いづれもその精神的な氣持をよく讀み取らさなければならない。

（四）作業化し、劇化し、十分立體的に取扱ふことが大切である。

（五）手紙、葉書に對する理解を與へ、やがてさうした文を書かうとする意欲を起させることも大切である。

三　朗讀

本文

ジューサン。。ユービン。。

イママデ　ハネオ　ツイテ　イタ

ハナコサント　ユキコサンワ。コン

ドワ　ユービンゴッコオ　スル　コ

トニ　シマシタ。。。

十三　いうびん

朗讀上の注意

○「はねをついて」を別々にいふ時、アクセントはハネオ　ツイテとなる。

○「することに」を別々にいふ時、アクセントはスル　コトニとなる。

○「することにしました」と續けていふ時、シマシタのアクセント

ハナコサンワ　オトートノ　サンチ
ャンオ　ヨンデ　キマシタ。サンチ
ャンワ　ヨロコンデ。アカイ　カミ
オ　チーサク　キッテ。キッテオ
コシラエマシタ。ユキコサンワ　ハ
ガキト　フートーオ　コシラエマシ
タ。ハナコサンワ。オカーサンカラ
オーキナ　カミノ　ハコオ　イタ
ダイテ　キテ。ポストオ　コシラエ
マシタ。

ソレカラ　ハナコサント　ユキコサ
ンワ。エンガワデ　リョーホーニ
ワカレテ　スワリマシタ。サンチャ

はあまり高くならない。

○「呼んで來ました」を別々にいふ時、アクセントはヨンデ　キマシタとなる。

○「紙」のアクセントはカミであるが助詞の「の」を伴つて平板式となる。

ンワ　マンナカニ　ポストオ　オイ
テ。ソノ　ソバニ　スワリマシタ。
ハナコサント　ユキコサンワ。ダマ
ッテ　ナニカ　カキハジメマシタ。
ソノ　アイダニ　サンチャンワ　カ
バンオ　トリニ　イキマシタ。
サンチャンガ　モトノ　トコロエ
カエッテ　キマスト。ポストノ　ナ
カニワ　モー　ニマイノ　ハガキガ
ハイッテ　イマシタ。サンチャン
ワ　ソレオ　カバンニ　イレテ。ハ
イタツニ　デマシタ。
ユービン。

○「その　そば」を別々にいふ時、アクセントはソノ　ソバとなる。

○次の言葉をそれ〴〵續けていふ時、下の語のアクセントはあまり高くならない。

「取りに　行きました」
「もとの　所へ」
「かへって　來ますと」
「はいって　ゐました」

○三ちゃんの言葉「いうびん」と呼ぶ聲は郵便配達の呼聲に似せて稍速くいふ方がよい。

イチマイオ　ハナコサンニ　ワタシマシタ。

ユービン。

イチマイオ　ユキコサンニ　ワタシマシタ。

ハナコサンワ　ニコニコシテ　ヨミマシタ。

シンネン　オメデトー　ゴザイマス。

ユキコサンモ　ウケトッタ　ハガキオ　ヨンデ　ミマスト。ヤッパリ。

シンネン　オメデトー　ゴザイマス、

○「おめでたう　ございます」を別々にいふ時、アクセントはオメデトー　ゴザイマスとなる。

○手紙を讀む所はいづれも稍ゆつくりいふ方がよい。

○「讀んでみますと」と續けていふ時、ミマストのアクセントはあまり高くならない。

〔參　考〕

ヨンデ（讀んで）

ヨンデ（呼んで）

ト　カイテ　アリマシタ。

アラ、オンナジデスネ、

ト　イッテ。フタリトモ　ワライマシタ。

サンチャンガ　オーキナ　コエデ。

モー　アリマセンカ。アッタラ

ハヤク　ダシテ　クダサイ、

ト　イーマシタ。

ハナコサンワ。

コンドワ　ワタクシガ　サキニ

カキマスカラ。ユキコサン　ゴヘンジオ　クダサイ、

ト　イッテ。テガミオ　カキマシ

○「書いてありました」と續けていふ時、アリマシタのアクセントはあまり高くならない。

○「もうありませんか」は元氣のよい聲で、終は上り調子にいふがよい。

○「出して下さい」と續けていふ時、クダサイのアクセントはあまり高くならない。

タ。ソーシテ　サンチャンノ　トコロエ　モッテ　イッテ。

サンセンノ　キッテオ　イチマイ　クダサイ、

ト　イーマシタ。

サンチャンガ　キッテオ　ワタシマスト。ハナコサンワ　ソレオ　ハッテ　ポストエ　イレマシタ。

サンチャンワ。ソノ　テガミオ　ユキコサンノ　トコロエ　モッテ　イッテ。

ユービン。

ト　イッテ　ワタシマシタ。

○「三ちゃんの所へ」と續けていふ時、トコロエのアクセントはあまり高くならない。

○「一枚下さい」と續けていふ時、クダサイのアクセントはあまり高くならない。

○郵便料金が改正されたので四錢と直して指導すべきである。

〔參　考〕

シセン（四錢）

シセン（支線・視線）

ハッテ（貼つて）

ハッテ（這つて）

○「ポストへ入れました」と續けていふ時、イレマシタのアクセントはあまり高くならない。

ユキコサンガ　アケテ　ミマスト。

アシタカラ　ガッコーガ　ハジマリマスガ。マタ　イッショニ　イキマショー。アサ　サソッテ　クダサイ、

ト　カイテ　アリマシタ。

ユキコサンワ。

オテガミ　アリガトー　ゴザイマス。キット　オサソイ　シマスカラ。サンチャント　イッショニ　マッテ　イテ　クダサイ、

ト　カイテ。キッテオ　ハッテ　ポストエ　イレマシタ。

十三　いうびん

○「あけて見ますと」を別々にいふ時、アクセントはアケテ　ミマストとなる。

○「さそって下さい」を別々にいふ時、アクセントはサソッテ　クダサイとなる。

○「書いてありました」と續けていふ時、アリマシタのアクセントはあまり高くならない。

○「ありがたうございます」と續けていふ時、ゴザイマスのアクセントはあまり高くならない。

○「おさそひしますから」を別々にいふ時、アクセントはオサソイシマスカラとなる。

○「待ってゐて下さい」と續けていふ時、クダサイのアクセントはあまり高くならない。

〔參　考〕

マッテ（待つて）

マッテ（舞つて）

一　指導概要

（一）教材

(1) 如何にして郵便ごつこが始められたか、郵便ごつこの實情はどうであつたか、三者の心持はどんなであつたかなどを讀取らせることが大切である。

(2) 素材の詮索や郵便に關する知識に拘泥することなく、遊びとして、興味的に、面白く扱ふことが大切である。

(3) 花子、雪子、三ちやんの境地に立たせてその心情を讀取らせることが大切である。そのために、人物場面等を具體的に生かせるやうに工夫しなければならない。

(4) 文字は、新出文字、弟　兩　分れ　枚　新　錢の六字。

(5) 注意すべき語句は次の如きものであらう。

「三ちやんは、それをかばんに入れて、はいたつに出ました。」「花子さんは、にこ〳〵して讀みました。」「三ちやんが　切手を渡しますと　花子さんは、それをはつて、ポストへ入れました。」「あしたから、學校が始まりますが、また一しよに行きませう。朝さそつて下さい。」「お手紙ありがたうございます。きつとおさそひしますから、三ちやんと一しよに待つてゐて下さい。」

(6) 花子さんと雪子さんとは親しい友達で尋常二年生、三ちやんは花子さんの弟で一年生である。

(7) 葉書、切手、封筒など、實物によつて理解させることが大切である。

（二）挿畫

七十六頁の挿畫は、三人が今いうびんごつこの準備をしてゐるところで、男の子は三ちやん、切手を作つてゐる。向つて右は雪子さんでふうとうを作つてゐる。机の上でポストを作つてゐるのは花子さんで、机の上に出來上つた葉書が置いてある。

八十二頁は、三ちやんが花子さんの手紙を雪子さんに配達してゐるところである。

（三）準備

葉書、切手、封筒、卷紙、便箋など。

十四　ニイサン　ノ　入營

一　要旨

兄さんの入營を、一家はいふに及ばず、一村擧つて歡び送つたその感激の場面及心持を讀取らせ、國家的精神を養ふ。

二　指導觀

（一）兵役は、國民の三大義務の一つであり、忠君愛國の精神の最も端的に表現せられた國家的情操の發露であつて隨つて入營を慶祝するのは單なる個人的意味でなく、實に國家的な慶祝であるのである。本課にはその精神がよく示されてゐるのであつて、よくその心持を味はせなければならない。

即ち、次の如き言葉である。

「オヅシキノ方デハ、シンルキヤ　近所ノ人ガ集ツテ、ニギヤカニ話ヲシテキマス。」「停車場デハ村長サン、校長先

生、ザイガウ軍人、青年學校ノ人タチガ、大ゼイ集ツテキマシタ。ニイサンヲ見ルト、『オメデタウ。』『オメデタウ。』トイヒマシタ。」

(二) 本課は、作者である弟が、兄さんの入營の日の感激の情景を、客觀的に叙べたものであつて、出立の準備が出來、みんな揃つて氏神樣へお參りをし、それから停車場にいつて汽車に乘り、愈々汽車が動き出す場面までの事が書かれてゐる。

感激の場面は、最後の、

「汽車ハシヅカニ動キ出シマシタ。『バンザイ。バンザイ。』ミンナハ、ムチユウニナツテサケビマシタ。ニイサンハ、汽車ノマドカラ、カホヲ出シテ、何ベンモバウシヲフリマシタ。」といふところであらう。最も餘情的に、印象深く表現せられてゐる。

(三) 「八時ガナツタノデ、ミンナソロツテ出カケマシタ。氏神樣ヘオマヰリシテ、ソレカラ停車場ヘ行キマシタ。」といふところは、我が國民性の特質たる敬神の思想を傳へたもので、特に注意しなければならない。

(四) 十分感激的に場面情景を味はせることが大切である。「ソバデ、オカアサンガ、何カ忘レタ物ハナイカト、イロイロセワヲシテイラッシャイマス。」は、如何にも母のやさしい心遣を示してをり、「シッカリヤッテ來イヨ。」には父らしい頼母しい心を見ることが出來る。

三　朗讀

本文

ジューシ°ニーサンノ　ニューエー°°

キョーワ　ニーサンガ　ニューエースル　ヒデス°°°

ニーサンワ　セーネンガッコーノ・フクニ　キカエマシタ°°ソバデ　オカーサンガ°ナニカ　ワスレタ　モノワ　ナイカト°イロイロ　セワオシテ　イラッシャイマス°°ソコエ　オトーサンガ　ハイッテ　キテ°

シタクワ　デキタカ、

十四　ニイサン　ノ　入營

朗讀上の注意

○入營者の門出を送る勇ましい情景が表れるやうに、元氣よく讀むがよい。

○「日」は「陽光」の意味の時は平板式にいふが、こゝのやうに「何何の當日」といふやうな意味の時は多くヒといふ。

○「ハイッテ　來テ」と續けていふ時、キテのアクセントはあまり高くならない。

○「シタクハ　出來タカ」の終は上り調子にいふ。

ト　オッシャルト。

ハイ　スッカリ　デキマシタ、

ト　ニーサンガ　コタエマシタ。

オザシキノ　ホーデワ。シンルイヤ
キンジョノ　ヒトガ　アツマッテ。
ニギヤカニ　ハナシオ　シテ　イマ
ス。

ハチジガ　ナッタノデ。ミンナ　ソ
ロッテ　デカケマシタ。ウジガミサ
マエ　オマイリオ　シテ。ソレカラ
テーシャジョーエ　イキマシタ。

テーシャジョーデワ。ソンチョーサ
ン。コーチョーセンセー。ザイゴー

○「ザイガウ軍人」「青年學校」の「軍人」「學校」等は上から續けていふけれどもグ・ガを通鼻音にはいはない。

グンジン。セーネンダン。セーネン
ガッコーノ　ヒトタチガ。オーゼー
アツマッテ　イマシタ。ニーサン
オ　ミルト。

オメデトー。

オメデトー、

ト　イーマシタ。

ニーサンワ　ニコニコシテ。ミンナ
ニ　オジギオ　シマシタ。

マモナク　キシャガ　キマシタ。ニ
ーサンワ　ゲンキナ　コエデ。

デワ　イッテ　マイリマス、

ト　アイサツ　シテ。キシャニ　ノ

○「集ッテ　キマシタ」と續けていふ時、イマシタのアクセントはあまり高くならない。

○「間モナク」はマモナクともいふ。

○「行ッテ　マキリマス」を別々にいふ時、アクセントはイッテマイリマスとなる。

リマシタ。

ワタクシガ オーキナ コエデ。

ニーサン ゴキゲンヨー、

ト ユート。オトーサンモ ツズイテ。

シッカリ ヤッテ コイヨ、

ト オッシャイマシタ。

キシャワ シズカニ ウゴキダシマシタ。

バンザイ。バンザイ。

ミンナワ ムチューニ ナッテ サケビマシタ。

ニーサンワ キシャノ マドカラ

○「ヤッテ 來イヨ」を別々にいふ時、アクセントはヤッテ コイヨとなる。

○「ヤッテ 來イヨ」の終は上り調子にいふ。

○「バンザイ バンザイ」はザの母音を心持長くひゞかせるやうにいふがよい。

○「ムチュウニ ナッテ」を別々にいふ時、アクセントはムチューニ ナッテとなる。

○「カホヲ」と單獨にいふ時のアクセントは平板式である。

カオオ ダシテ。ナンベンモ ボーシオ フリマシタ。

〔參考〕

フリマシタ（振りました・降りました）

フル（振る）

フル（降る）

四 指導概要

（一）教材

(1) 作者の境地に立つて、感激の場面及心持を捉へさせることが大切である。

(2) どういふ人々が見送つたか、家を出てどんな順序に停車場へいつたか、停車場ではどうであつたかなどを文に即して讀取らせることが大切である。

(3) 兄さんの元氣さうな姿を捉へさせることが大切である。即ち次の言葉によつて示されてゐる。

「『シタクハ出來タカ。』ト、オッシャルト、『ハイ、スッカリ出來マシタ。』ト、ニイサンガ答ヘマシタ。」「ニイサンハニコ〳〵シテ、ミンナニオジギヲシマシタ。」「ニイサンハ、汽車ノマドカラ、カホヲ出シテ、何ベンモバウシヲフリマシタ。」

(4) 綴方と聯關をもつて、「ニイサンノ入營」といふ一つの生活事實を、文にまで表現の過程をしらべさせることが大切である。又叙述のすぐれた點を味はせることが大切である。

(5) 文字は、新出文字 營 服 氏 汽 乘るの五字、讀替文字 入 靑 村長 人の五字である。

(6) 入營、氏神樣、在鄕軍人、靑年學校等の言葉の意味を明瞭にしなければならない。

(二) 挿　畫

八十七頁の畫は、停車場に於ける見送の場面で、場所はプラットホームである。手前に立つてゐるのが兄さん、兄さんと向ひあつてゐる和服姿が村長さん、その左の洋服姿が校長先生、その隣がお父さんである。お父さんの前の子供は作者たる弟であり、向つて左の軍服は在郷軍人、旗は在郷軍人會の分會旗である。後の軍服らしい姿は青年學校の人たちで青年學校の旗をもつてゐる。向つて右の和服姿は村の人々である。

(三) 準　備

讀本、掛圖。

十五　すゞめ

一　要　旨

寒い雪の日の夕方、三羽の雀が枯枝に並んでゐる。如何にも寒さうに體をつけ合つてゐる。之れを憐み同情して出來たのが此の詩である。此の詩を味はせ、動物に對する愛憐同情の心を養ふ。

二　指導觀

(一) 此の詩は純抒情詩と見るべきで、雀に對する愛憐同情を寄せた心の表現である。三節から成つてゐるが、一貫して靜寂の心持を與へる。

(二) 第一節は、寒い日の夕方、ふと見ると木の枝に雀が三羽止つてゐる。雪がちら〳〵降つてゐる。木は枯木、雀は三羽、雪はちら〳〵降る。夕方である。如何にも靜かで寂しい。

第二節は、更によく見ると、三羽の雀が、「ぴつたりとからだをつけ合つて、」並んでゐる。如何にもかはいさうである。「ぴつたりとからだをつけ合つて」ゐるのは、雀同志も互に憐み合つてゐるやうに感ぜられる。

第三節は、作者が「お前のうちはどこにある。」のか、「早くおかへり」もう「日がくれる」から、と同情しての言葉である。

(三) 此の詩は七と五の調子を本體としてゐるが、自由詩的な不定型のものである。靜に讀むと內容の靜寂とよく融合して味はれる。

三　朗　讀

本文

ジューゴ°°スズメ°°

キノ　エダニ

スズメガ　サンバ°°

十五　す　ゞ　め

朗讀上の注意

○粉雪降る夕暮時の情景、寒さと饑じさに體をよりそへ合ふ雀達に「早くおかへり」といつて歸心を促す作者の心情、それ等のことを想ひ描きながら全體をゆつくりとした調子でよむがよい。

ユキガ　チラチラ
・フッテ　イル

・ピッタリト
カラダオ　ツケアッテ、
ナランダ　スズメ。
サンバノ　スズメ

オマエノ　ウチワ
ドコニ　アル
ハヤク　オカエリ。
ヒガ　クレル

○「降ってゐる」のフが母音無聲化をしない時はアクセントは次のやうになる。
フッテ　イル

〔參考〕
サンバ（三羽）
サンバ（產婆）

■ 指導概要

（一）教材

(1) 通讀の後、作者が「木の枝に　すゞめが三羽」止つてゐるのを見て詠つたのだといふ事を讀取らせ、更に數回朗讀の後、總合しての感想を發表させるがよい。感想としては「さみしい」「かはいさうだ」位でよからう。

(2) 讀を深めて後、挿畫と相俟つて、
第一節では「木の枝」「すゞめが三羽」「雪がちら〳〵」の言葉を契機として、「寒さうだ」「さびしさうだ」の心持を味はせ、
第二節では「ぴつたりとからだをつけ合つて、並んだ雀」の言葉によつて、「かはいさうだ」の心持を味はせ、
第三節では「お前のうち」「早くおかへり、」「日がくれる。」を契機として、日は暮れる。雪はだん〳〵多くなるし、寒さはいよ〳〵ひどくなる、早くお家へおかへりと同情してゐる心持を味はせるがよい。

(3) 靜にゆつくり讀ませて充分に讀浸らせて後、感想を自由に發表させるがよい。

(4) 新出文字としては　降の一字だけである。雨が降る　雪が降る　等を練習させるがよい。

（二）挿畫

雪の日の夕方である。葉の枯れ落ちた木の枝、雪がちら〳〵降りかゝる。寒さうにさみしさうに三羽の雀が體をつけ合つて並んでゐる。靜にさみしく憐れな情景である。

十六　白兎

一　要旨

わにざめを騙して隱岐國から因幡國に渡つた白兎が、わにざめに毛をむしり取られ、八十神に苦しめられてゐたが、情深い大國主命に救はれたといふ神話を讀むことによつて、大國主命の御德を偲ばせ、延いて建國に由緒のある神樣方の德を思はせ、併せて童話的興味を深めて行く。

二　指導觀

（一）十頁に亘る長文の物語である。書出しも只、「島に居た兎が向かふの陸へ行つて見たいと思ひました」となつてゐるし、八十神の事も唯「大ぜいの神樣」となつて、原據よりは餘程單純化して、童話化されてゐる。

（二）單純化し、童話化されてはゐるが、卷三の「國引」と連絡させ、後に來る多くの神話と續く一つの鎖である事を意識して取扱はなければならない。

（三）物語は大體三段に分けて考へることが出來る。

第一段は、白兎が、わにざめを騙して陸に上るまでの話であり、第二段は、そのむくいとでもいはうか、わにざめに毛をむしり取られ、八十神に苦しめられた話及び、白兎が大國主命の將來を豫言したやうな話である。

（四）長い物語であるだけに、新出文字も多いし、それ、その、等の代名詞や、前の筋、事柄等を要約しては話を進める代名詞的な語句も多く、讀書力の遲滯した兒童には一見讀解しにくゝも思はれるが、童心に觸れる話の興味が、その難關を割合に容易に切拔けさせてくれる。何處までも兒童自身が讀み取り、讀み味ふやうに指導しなければならない。

三　朗讀

頁	本文	朗讀上の注意
92	ジューロク。シロウサギ。	○お話をするやうにゆつくり讀むがよい。特に著しく速度の變化を附ける處もない。
	シマニ　イタ　シロウサギガ。ムコ ーノ　リクエ　イッテ　ミタイト オモイマシタ。	○「行つてみたいと」を別々にいふ時、アクセントはイッテ　ミタイトとなる。
	アルヒ　ハマベエ　デテ　ミルト。 ワニザメガ　イマシタノデ。	○「出て見ると」と續けていふ時、ミルトのアクセントはあまり高くならない。

キミノ　ナカマト　ボクノ　ナカ|
マト　ドッチガ　オーイカ　クラ|
ベテ　ミヨー、

93

ト　イーマ・シタ。。ワニザメワ。
ソレワ　オモシロカロー、

94

ト　イッテ。スグニ　ナカマオ　オ
ーゼー　ツレテ　キマ・シタ。。。
シロウサギワ　ソレオ　ミテ。
ナルホド　キミノ　ナカマワ　ズ||
イブン　オーイナ。。コレデワ　ボ|
クラノ　ホーガ　マケルカモ　シ
レナイ。。キミラノ　セナカノ　ウ
エオ　アル|イテ　カゾエテ　ミル

○「くらべてみよう」を別々にいふ時、アクセントはクラベテ　ミ|ヨーとなる。

○「連れて來ました」を別々にいふ時、アクセントはツレテ　キマ|シタとなる。

○「君らの」はキミラノといふ人もある。

○「かぞへてみるから」と讀けていふ時、ミ|ルカラのアクセントはあまり高くならない。

95

カラ。ムコーノ　リクマデ　ナラ|
ンデ　ミタマエ、
ト　イーマ・シタ。。。
ワニ|ザメワ　シロウサギノ　ユー|
トーリニ　ナラビマ・シタ。。シロウサ
ギワ。ヒトツ。フタツ。ミッツ。ヨ
ッツト　カゾエテ　ワタッテ　イキ|
マ・シタガ。モー　ヒトアシデ　リク
エ　アガロート　ユー　トコロデ。
キミラワ　ン|マク　ダマサレタ
ナ。。ボクワ　ココエ　ワタッテ
キタカッタノダ。。アハハハ、
ト　イッテ　ワライマ・シタ。。

96

○「並んでみたまへ」を別々にいふ時、アクセントはナランデ　ミ|タマエとなる。

○「いふ通りに」、を別々にいふ時、アクセントはユー　ト|ーリニとなる。

○「だまされたな」の終は上り調子。

○「あははは」のアクセントは不定。

ワニザメワ　ソレオ　キクト　タイソー　オコリマシタ。イチバン　シマイニ　イタ　ワニザメガ。シロウサギオ　ツカマエテ　カラダノ　ケオ　ミンナ　ムシリトッテ　シマイマシタ。

シロウサギワ　イタクテ　タマリマセンカラ。ハマベニ　タッテ　ナイテ　イマシタ。ソノトキ　オーゼーノ　カミサマガ　オトーリニ　ナッテ。

オマエ　ナゼ　ナイテ　イルノカ、ト　オタズネニ　ナリマシタ。シ

○「お通りになって」を別々にいふ時、アクセントはオトーリニナッテとなる。

○「なぜ泣いてゐるのか」の終は下り調子。

○「泣いてゐるのか」を別々にいふ時、アクセントはナイテ　イルノカとなる。

ロウサギガ　イママデノ　コトオモーシマスト。カミサマワ。

ソレナラ　ウミノ　ミズオ　アビテ　ネテ　イルガ　ヨイ、ト　オッシャイマシタ。

シロウサギワ　スグ　ウミノ　ミズオ　アビマシタ。スルト　イタミガ　イッソー　ヒドク　ナッテ。ドーニモ　タマラナク　ナリマシタ。

ソコエ　オークニヌシノ　ミコトトユー　カミサマガ　オイデニ　ナリマシタ。コノ　カタワ。サキホドオトーリニ　ナッタ　カミサマガ

〔參考〕

イッソー（一層）

イッソー（一般）

○「ひどくなって」と續けていふ時、ナッテのアクセントはあまり高くならない。

○「おいでになりました」を別々にいふ時、アクセントはオイデニナリマシタとなる。

○「この方は」を別々にいふ時、アクセントはコノ　カタワとなる。

○「お通りになった」を別々にいふ時、アクセントはオトーリニナッタとなる。

タノ　オトートサンデス。アニサマ
ガタノ　オモイ　フクロオ　カツイ
デ　イラッシャッタノデ。オソク
オナリニ　ナッタノデス。
コノ　オークニヌシノ　ミコトモ。
オマエ　ナゼ　ナイテ　イルノカ、
ト　オタズネニ　ナリマシタ。シロ
ウサギワ　ナキナガラ。マタ　イマ
マデノ　コトオ　モーシマシタ。オ
ークニヌシノ　ミコトワ。
カワイソーニ。ハヤク　カワノ
ミズデ　カラダオ　アラッテ。ガ
マノ　ホオ　シーテ　ソノ　ウエ

一二四

○「兄様方の」はアニサマガタノともいふ。

○「お尋ねになりました」を別々にいふ時、アクセントはオタズネニ　ナリマシタとなる。

○「がま」のアクセントは不確。
〔參考〕
ホオ（穂を）
ホオ（帆を）

ニ　コロガルガ　ヨイ、
ト　オッシャイマシタ。
シロウサギガ　ソノ　トーリニ　シ
マスト。カラダワ　スグ　モトノ
ヨーニ　ナリマシタ。ヨロコンデ
オークニヌシノ　ミコトニ。
オカゲサマデ　スッカリ　ナオリ
マシタ。アナタワ　オナサケブカ
イ　オカタデスカラ。ノチニワ
キット　エライ　オカタニ　オナ
リデショー、
ト　モーシマシタ。
シロウサギノ　イッタ　トーリ。オ

○「その通りに」を別々にいふ時、アクセントはソノ　トーリニとなる。

○「もとのやうに」と續けていふ時、ヨーニのアクセントはあまり高くならない。

○「いった通り」を別々にいふ時、アクセントはイッタ　トーリとなる。

ークニヌシノ　ミコトワ　ソノ　ノ
チ　エライ　オカタニ　オナリニ
ナリマシタ。

○「おなりになりました」を別々にいふ時、アクセントはオナリニナリマシタとなる。

四　指導概要

（一）教材

(1) 提出の方法を工夫して、新出文字、讀替文字の讀方を授け、各自の力で十分に讀ませ、物語の筋を掴ませる。

(2) 物語は大體、指導觀に示したやうに三段に分かれてゐる事を讀み取らせる。特に第三段の大國主命のお情深い御行爲に感銘させる。この時、「兄樣方の重いふくろをかついでいらつしやつた」といふ事實について考へさせ、從順なお方でもあつた事に氣付かせる。

(3) 最後の白兎の感謝の言葉及括りの文について、大國主命について幾分の補說が必要であらう。

(4) 總て神話取扱の用意として、穿鑿に過ぎたり、理智的科學的な檢討は禁物であり、この教材等は專ら興味本位に取扱ふ裡に要旨の目的を達しなければならない。

(5) 唱歌と連絡をとりたい。

（二）挿畫

第一圖。白兎がわにざめの頭數を數へながら向かふの陸に渡つて行く處である。もう目的の陸に間のないところ。

第二圖。泣いてゐる白兎に　情深い大國主命が親切に治療法を示してゐられるところ。側にあるのが穗の出た蒲。命の背の大きな袋、兎のないてゐるところをよく觀察させる。

（三）準備

わにざめの標本或は形態習性等を示す圖。

五　參考

原據は古事記である。

十七　豆まき

一　要旨

作者たる良雄さんの行動を通して我が國古來からの習俗の一つである「豆まき」の情景を讀取らせ、一家團欒の樂しい氣持を味はせる。

二　指導觀

（一）豆まきは我が國古來からの習俗の一つで、特に子供に喜ばれる。それだけ本教材は兒童に興味をもつて迎へられるであらう。

（二）本課は作者たる良雄さんが、歲男になつて豆をまくたのしさが中心となつて表現せられたものであつて、その

心持を促へさせることが大切である。

「『今年からお前まけ。』と、おとうさんがおつしやつたので、ぼくはうれしくてたまりません。」「ぼくは、早く晩になればよいと思ひました。」「ぼくは、少しはづかしかつたが、思ひ切つて、『福は内、鬼は外。』と聲をはり上げて、豆をまきました。」「ぼくもおもしろくなつて、だん〳〵大きな聲を出しながら豆をまきました。」「鬼は外、鬼は外。』といひながら、豆を庭に向かつてねせいよくまきますと、おかあさんが、雨戸をぴしやりとおしめになりました。」等の言葉によくその心持が示されてゐる。

(三) 叙述の順序は、お父さんが「今年からお前まけ。」といはれたのでうれしくなつて、早く晩になればよいと待つ心、やがて晩が來て、豆まきをする場面、最後に豆まきが終つて、みんなで豆を年の數だけたべる團樂の心持が叙されてゐる。その間に、父母、作者、姉、弟など一家の人々の姿が寫し出されてゐる。

(四) 「これで、ほんたうに一つ年を取つたのですよ。これからもつと勉强しなければいけません。」といふ母の言葉こそ、節分の眞の意義を傳へるものであらう。十分味はせなければならない。そして成長するものの樂しさがある。

(五) 「きやつ、きやつ。」と大さわぎして豆を拾ふ妹や弟、「鬼は内、福は外。」といつたので、どつと笑ふみんなの聲、雨戸をぴしやりとしめるお母さんの姿、一家に漂ふ明朗な氣持を感得させることが大切である。

(六) 豆を神だなに供へるところなども、敬神の心持を示す民族精神のうるはしさであつて、注意すべきことであらう。

三　朗讀

本文

101　ジュー|シチ。。マメ|マキ。。

102　キョー|ワ　セツブンデ　マメ|マキノ　ヒ|デス。。。

コトシカラ　オマエ　マ|ケ、ト　オトーサンガ　オッシャッタノデ。ボクワ　ウレシクテ　タマリマセン。。。

オカ|ーサンワ　マメ|オ　タクサン　イッテ、マス|ニ　イレ。カミダナニ　オソナエニ　ナリマ|シタ。。ボクワ　ハヤク　バン|ニ　ナレバ　ヨイト　オモイマ|シタ。。。

朗讀上の注意

○「豆まき」のアクセントは平板式にもいふ。

〔參考〕

マ|ケ（撒け・蒔け）
マケ（負・捲け）

イ|ッテ（煎って）
イッテ（言って・行って）

○「お供へになりました」を別々にいふ時、アクセントはオソナエニ　ナリマ|シタとなる。

○「晩になれば」を別々にいふ時、アクセントはバン|ニ　ナレバとなる。

ダンダン　ウスグラク　ナルト。アチラデモ　コチラデモ　マメマキノ　コエガ　キコエマス。オトーサンガ。

ヨシオ。ウチデモ　ソロソロ　ハジメルカネ、

ト　オッシャッテ。カミダナカラ　マスオ　オロシテ　クダサイマシタ。

ボクワ　スコシ　ハズカシカッタガ。オモイキッテ。

フクワ　ウチ。オニワ　ソト、

ト　コエオ　ハリアゲテ　マメオ

○「始めるかね」の終は上り調子にいふ。

○「下して下さいました」と續けていふ時、クダサイマシタのアクセントはあまり高くならない。

○「福は・鬼は」はいづれも語尾を幾分長くひゞかせる心持でいふがよい。

○「福は」「鬼は」のアクセントは一般にはフクワ　オニワであるが、こゝは呼聲であるから上記のやうにいふ。

マキマシタ。

ホーボーノ　ヘヤオ　マイテ　アルクト。イモートヤ　オトートガ　アトカラ　ツイテ　キテ。キャッ　キャッ、ト　オーサワギオ　シテ　マメオ　ヒロイマシタ。ボクモ　オモシロク　ナッテ。ダンダン　オーキナ　コエオ　ダシナガラ　マメオ　マキマシタ。ソノウチニ　ウッカリシテ。オニワ　ウチ。フクワ　ソト、ト　イッタノデ。ミンナガ　ドット　ワライマシタ。

シマイニ　エンガワニ　デテ。オニ

〔參考〕

ホーボー（方々）

ホーボー（飯綱）

○「きゃつ、きゃつ」はアクセント不定。

○「おもしろくなって」と續けていふ時、ナッテのアクセントはあまり高くならない。

○「どっと」はアクセント不定。

ワ　ソト。オニワ　ソト、ト　イー
ナガラ　マメオ　ニワニ　ムカッテ。
イセーヨク　マキマスト。オカーサ
ンガ　アマドオ　ピシャリト　オシ
メニ　ナリマシタ。。。
ソレカラ　ミンナデ。マメオ　トシ
ノ　カズダケ　タベマシタ。。オカー
サンワ。
コレデ　ホントーニ　ヒトツ　ト
シオ　トッタノデスヨ。。コレカラ
モット　ベンキョーシナケレバ
イケマセン、
ト　オッシャイマシタ。。

〔參考〕
ニワ（庭）
ニワ（二羽）

○「ぴしゃりと」は速くいふがよい。
○「おしめになりました」を別々にいふ時、アクセントはオシメニナリマシタとなる。

○「取ったのですよ」の終は上り調子にいふがよい。

■指導概要

（一）教材

(1) 作者良雄さんの心になつて讀ませることが大切である。
(2) 良雄さんの樂しい心、一家の人々の明かるい喜びの心持などを、文の中から讀取るやうに指導することが大切である。
(3) 兒童の經驗と結びつけ、綴方と聯關をもつて指導することが大切である。
(4) 「福は內、鬼は外。」の意味をさとらせ、豆まきが迷信的なものでなく、一つの儀式であり、十分精神的な意味をもつてゐるものであることをさとらせたい。
(5) 「おとうさんがおつしやつたので」「お供へになりました。」「ますを下して下さいました。」「おかあさんが、雨戸をぴしやりとおしめになりました。」等の如く、長上に對する敬語が多く使用せられてゐるから注意して指導しなければならない。
(6) 新出文字は、節　供へ　福　內　姉　拾ふ　勉の七字、讀替文字は　分　今年　後　强の四字である。
(7) 語句は兒童の日常語を使用してゐるため特に困難なものはない。節分、神だな、雨戸の如きものであらう。

（二）挿畫

良雄が「福は內、鬼は外。」といひながら豆をまいてゐるところである。妹や弟が「きやつ〳〵」といひながらそれを拾つてゐる。

（三）準備

十七　豆　まき

掛圖。

（四）参考

豆まきは追儺ともいつて、悪氣を拂ふために豆をまくのである。舊記によると、大晦日の夜即ち除夜に行つたのであるが、いつの間にか變遷して立春の前夜即ち二月二三日頃の夜行ふやうになつた。

豆をまくのは一家を司る者で、これを歳男と名づけ、大聲で「福は内、鬼は外。」と唱へながらまくのである。

柊の枝、豆殼・鰯の頭などを戸外にさすところもある。悪氣を拂ひ陽春を迎へる意味である。

十八　百合若

一　要旨

鐵の弓を引くといふ無双の勇者百合若が、天子様の命によつて敵を追ふ戰の歸りに、家來の悪者兄弟にあざむかれたが、再び機會に惠まれて國に歸り、めでたく反逆の悪者を討つたといふ武勇傳説の面白さを味はせ、併せて長文の讀解力を養ふ。

二　指導觀

（一）冒頭の書出しのやうに、この一篇は百合若の武勇を中心とした物語で、雲太郎兄弟の懲悪がその裏に潜んでゐる。この武勇を中心に取扱ひ、讀み浸らせて行く裡に、兒童には自然に懲悪の天理が感得せられるであらう。

（二）百合若の武勇は、「大きな鐵の弓と鐵の矢を持ち」「さかんに鐵の矢を射かけ」「追ひかけ追ひかけ」「すつかり追ひはらつて」等や最後の方の「すぐそれを折つて」「その弓を取上げ、鐵の矢をつがへて、滿月のやうに引きしぼりました」等に、よく具體化されてゐる。

（三）きれいな島を見つけて、「しばらくとゝで休むこと」になつたことや、「三日三晩たつても、まだ目がさめません」では、如何に前の戰が激しいものであつたかゞ窺はれる。表現に即して、想像を働かせ、文の味を深く味はせるやうに指導しなければならない。

（四）全文を大體の筋によつて分けると、天子様の命で敵を追ひはらつたこと、歸りに、百合若があまり疲れて眠りつゞけたので、雲太郎兄弟の悪企みに遭つて島に置きざりにあひ、雲太郎兄弟は望み通りに大將になつたこと、其の後何年かたつて百合若が歸つて來たこと、お正月の弓の會で、遂に悪者兄弟が悪の酬いを受けたことの四段に分かれる。

（五）終始武勇の一貫した華々しさよりは、かうした、得意の場面、失意落魄した英雄の姿、更に復活した英雄の眞面目に觸れて兒童は一層の興味を覺えるであらう。指導者は巧にその心理を摑んで指導にかゝらなければならない。

（六）懲悪の天理、因果應報の實相は兒童の自然に讀みとる程度に委せたい。深く讀み味はせる事さへ出來れば、それは自然に兒童の胸に感ずるであらう。

三　朗讀

本文

ジューハチ。ユリワカ。。

ムカシ。ユリワカト　ユー。ユミノ
ジョーズナ　タイショーガ　アリマ
シタ。。。

アルトシ。ガイコクノ　グンゼー
ガ。タクサンノ　フネニ　ノッテ
セメヨセテ　キマシタ。。テンシサマ
ワ　ユリワカオ　オメシニ　ナッテ。
ハヤク　イッテ　テキオ　オイハ
ラエ、

朗讀上の注意

○「大將がありました」と續けていふ時、アリマシタのアクセントはあまり高くならない。

○「軍ぜい」はグンゼーと平板式にもいふ。

○「お召しになつて」を別々にいふ時、アクセントはオメシニ　ナッテとなる。

〔參考〕
オメシ（お召し）
オメシ（織物の名）

ト　オッシャイマシタ。。。

ユリワカワ　オーキナ　テツノ　ユ
ミト　テツノ　ヤオ　モチ。オーゼ
ーノ　ケライオ　ツレテ　デカケマ
シタ。。ソーシテ。サカンニ　テツノ
ヤオ　イカケマシタノデ。テキノ
フネワ　ツギツギニ　シズメラレ。
ノコッタ　フネワ　チリジリニ　ナ
ッテ　ニゲダシマシタ。。ソコデ　ユ
リワカノ　グンゼーワ　フネオ　ダ
シテ　オイカケ　オイカケ。トート
ー　テキノ　フネオ　スッカリ　オ
イハラッテ　シマイマシタ。。。

○「鐵の弓」「鐵の矢」を別々にいふ時、アクセントはテツノ　ユミ　テツノ　ヤとなる。

○「敵の舟」を別々にいふ時、アクセントはテキノ　フネとなる。

○「追ひはらってしまひました」と續けていふ時、シマイマシタのアクセントはあまり高くならない。

コーシテ　カチニ　カッタ　ユリワ
カノ　グンゼーワ。モトノ　ハマベ
エ　ヒキカエス　コトニ　ナリマシ
タ。トコロガ。カエル　トチューニ
キレーナ　シマガ　アリマシタノ
デ。ユリワカワ　ケライノ　クモタ
ロー　アメタロート　ユー　キョー
ダイノ　モノオ　ツレテ。ソノ　シ
マエ　アガッテ　ミマシタ。ソコニ
ワ　ウツクシー　クサガ　イチメン
ニ　ハエ。カワイラシー　トリガ
オモシロク　ウタッテ　イマシタ。
アー、ヨイ　トコロダ。シバラク

○「ひきかへすことになりました」と續けていふ時、第二語以下のアクセントはあまり高くならない。

〔參考〕

カエル（歸る）
カエル（蛙）

キョーダイ（兄弟）
キョーダイ（鏡臺）

○次の言葉をそれ〴〵別々にいふ時、アクセントは下記のやうになる。

「その島へ」　ソノ　シマエ
「上ってみました」　アガッテ　ミマシタ

○「あゝ」はアクセント不定。

ココデ　ヤスム　コトニ　シヨ
ー、
ト　イッテ。ユリワカワ　ゴロリト
クサノ　ウエニ　ネコロビマシ
タ。。。
ナガイ　アイダノ　ツカレガ　デタ
ト　ミエテ。ユリワカワ　イツノマ
ニカ　ダッスリ　ネコンデ　シマイ
マシタ。ソーシテ。ミッカミバン
タッテモ　マダ　メガ　サメマセン
デシタ。。。
コノ　ヨースオ　ミテ。クモタロー
キョーダイワ　ウト　ウルイ　ココ

○「休むことにしよう」と續けていふ時、第二語以下のアクセントはあまり高くならない。

○「草の上に」を別々にいふ時、アクセントはクサノ　ウエニとなる。

○「出たとみえて」と續けていふ時、ミエテのアクセントはあまり高くならない。

○「いつの間にか」はイツノマニカともいふ。

○「ねこんでしまひました」と續けていふ時、シマイマシタのアクセントはあまり高くならない。

ロオ　オコシ。ユリワカオ　シマニ
オキザリニ　シテ。ジブンタチガ
タイショーニ　ナロート　カンガエ
マシタ。フタリワ　フネエ　カエッ
テ。

タイショーワ　ヤノ　キズガ　モ
トデ。トートー　コノ　シマデ
オナクナリニ　ナッタ、
ト　イーフラシマシタ。
クモタローキョーダイワ。ユリワカ
ノ　グンゼーオ　ヒキーテ　カエリ
マシタ。ソーシテ　テンシサマニ。
ユリワカワ　ウチジニオ　イタシ

〔參　考〕
ダイショー（大將）
タイショー（大正・對照・大勝・隊商）

○「この島で」を別々にいふ時、アクセントはコノ　シマデとなる。
○「おなくなりになった」を別々にいふ時、アクセントはオナクナリニ　ナッタとなる。
○「百合若の軍ぜい」を別々にいふ時、アクセントはユリワカノグンゼーとなる。
○「うち死をいたしました」を別々にいふ時、アクセントはウチジニオ　イタシマシタとなる。

マシタカラ。ワタクシタチ　キョ
ーダイノ　チカラデ。テキオ　ス
ッカリ　オイハラッテ　マイリマ
シタ。

ト　モーシアゲマシタ。
キョーダイワ　オモイドーリ　タイ
ショート　ナリ。コレマデ　ユリワ
カノ　イタ　リッパナ　シロニ　ス
ンデ　イバッテ　イマシタ。
ソノ　ノチ　ナンネンカ　タッテカ
ラノ　コトデス。ナンセンシテ　オ
ニガシマエ　ナガレツイタ　リョー
シガ。オニオ　イッピキ　ツレテ

○「追ひはらってまゐりました」と續けていふ時、マイリマシタのアクセントはあまり高くならない。

〔參　考〕
シロ（城）
シロ（白）
○「いばってゐました」と續けていふ時、イマシタのアクセントはあまり高くならない。

○「連れてかへって」を別々にいふ時、アクセントはツレテ　カエ

カエッテ　キタト　ユー　ウワサガ
ツタワリマシタ。コレオ　キータ
クモタローキョーダイワ。
ソレワ　メズラシー　モノダ。スグ　ツレテ　コイ、
ト　ケライニ　イーツケマシタ。
ツレラレテ　キタノオ　ミルト。カミモ　ヒゲモ　ボーボート　ノビ。カオモ　テアシモ　アカニ　ウズマッテ。マルデ　コケガ　ハエタ　ヨーナ　オトコデシタ。
ナルホド。オニノ　ヨーデモ　アリ。ヒトノ　ヨーデモ　アル。ミッテとなる。

一四二

○「連れてかへって來た」と續けていふ時、キタのアクセントはあまり高くならない。

○「それは珍しい」を別々にいふ時、アクセントはソレワ　メズラシーとなる。

○「連れて來い」を別々にいふ時、アクセントはツレテ　コイとなる。

○「連れられて來たのを」を別々にいふ時、アクセントはツレラレテ　キタノオとなる。

〔參考〕
カミ（髮・紙・神）
カミ（上・加味・神）
アカ（垢）
アカ（赤・あか（銅のこと））

○「生えたやうな男でした」と續けていふ時、ヨーナ　オトコデシタのアクセントはあまり高くならない。

○次の言葉をそれ〴〵別々にいふ時、アクセントは下記のやうになる。
「鬼のやうでも」　オニノ　ヨーデモ

ヤコエ　ツレテ　イッタラ　ヒト
ガ　メズラシガッテ　ミルダロー。
ト　イッテ。クモタローキョーダイワ。ソノ　オトコニ　コケマルト
ユー　ナオ　ツケ。シバラク　イエニ　オク　コトニ　シマシタ。
ソノウチニ　トシガ　カワッテ　オショーガツニ　ナリマシタ。クモタローアメタローワ。ケライオ　アツメテ　ユミノ　カイオ　ヒラキマシタ。
クモタローガ　ユミオ　イヨートスル　トキ。

「人のやうでも」　ヒトノ　ヨーデモ
「連れて行ったら」　ツレテ　イッタラ

○次の言葉をそれ〴〵別々にいふ時、アクセントは下記のやうになる。
「その男に」　ソノ　オトコニ
「おくことに」　オク　コトニ

○「おくことにしました」と續けていふ時、シマシタのアクセントはあまり高くならない。

○「弓の會」を別々にいふ時、アクセントはユミノ　カイとなる。

アハハハ。ナンダ。アンナ　ユミシカ　ヒケナイノカ、

ト　オーキナ　コエデ　ワラウ　モノガ　アリマシタ。ミルト　ソレワ　コケマルデシタ。クモタローワ　オコッテ　イーマシタ。

ナンダ　コケマル。モー　イチド　イッテ　ミロ。

コケマルワ　ヘーキナ　カオデ。

ソンナ　ユミワ　アカンボーデモ　ヒケマショー。ハハハ、

ト　マタ　ワライマシタ。

ナニオ　ナマイキナ。ソレナラ

○「あんな弓しか」を別々にいふ時、アクセントはアンナ　ユミシカとなる。

○こけ丸の言葉はゆつくりと落付いていふがよい。稍嘲笑するやうな心持を表して。

○「笑ふものが」を別々にいふ時、アクセントはワラウ　モノガとなる。

○「笑ふものがありました」と續けていふ時、アリマシタのアクセントはあまり高くならない。

○雲太郎の言葉は怒りの心持の表れるやうに稍速くせきこむやうにいふがよい。

○「何だ」は下り調子にいふ。

○「いってみろ」を別々にいふ時、アクセントはイッテ　ミロとなる。

○「そんな弓は」を別々にいふ時、アクセントはソンナ　ユミワとなる。

コレオ　ヒーテ　ミロ、

ト　イッテ。クモタローワ　イチバン　ツヨイ　ユミオ　ワタシマシタ。

コケマルワ　スグ　ソレオ　オッテシマイマシタ。クモタローワ　クヤシガッテ。ムカシ　ユリワカガツカッタ　テツノ　ユミヤオ　モチダサセマシタ。ソーシテ。

コレオ　ヒーテ　ミロ。ユリワカサマノ　ユミヤダ。ヒケナカッタラ　イノチガ　ナイゾ、

ト　イーマシタ。

十八百合若

○「これを引いてみろ」を別々にいふ時、アクセントはコレオ　ヒーテ　ミロとなる。

〔參考〕

イチバン（最も）

イチバン（一番（番號））

オッテ（折って）

オッテ（追って・追手）

○「折ってしまひました」と續けていふ時、シマイマシタのアクセントはあまり高くならない。

コケマルワ　ニッコリ　ワラッテ
ソノ　ユミオ　トリアゲ。テツノ
ヤオ　ツガエテ　マンゲツノ　ヨー
ニ　ヒキシボリマシタ。キューニ
ヤサキオ　キョーダイノ　ホーエ
ムケテ。
ミワスレタカ。ワレコソ　ソノ
ユリワカダ。カクゴシロ、
ト　イーマシタ。
フタリワ　オドロイテ　ニゲダシマ
シタガ。スグニ　イコロサレテ　シ
マイマシタ。

○「滿月のやうに」と續けていふ時、ヨーニのアクセントはあまり高くならない。

○「きゃうだいの方へ」と續けていふ時、ホーエのアクセントはあまり高くならない。

○こゝのこけ丸の言葉は强く嚴しくいふがよい。

■ 指導概要

（一）教　材

(1) 百合若の武勇を中心として、得意の場面、失意の場面、復活の場面、或は戰の話、島に置きざりにされた話、遭つた話、惡い家來に酬いた話等のやうになるべく、次の話、次の運命に期待や興味の餘韻をつなぐやうに出來るだけ大きく分節して取扱ひたい。

(2) 第一段の取扱ひでは次の第二段の變化に期待を持つやうに、第二段では第一段の華々しさにくらべて、一時の落魄に對する同情と次の復活を希ふ緊張とを持たせ、第三段でめでたい話の終末を樂しませるやうに指導する

(3) 三分節して取扱つたら次には全文の取扱をして一貫した筋の面白さを味はせ、話方の練習等をする。

(4) 文字語句は各分段の指導の度に、その部分のものを取扱ひ、朗讀は長文であるから種々に變化をつけることを工夫する。

（二）挿　畫

第一圖　百合若がきれいな島へ上陸してゐる圖。向かふに舟が見え、鳥が飛び、あたりには美しい草が一面に生えてゐる。本文の取扱の時利用する。

第二圖　百合若が鐵の弓、鐵の矢で雲太郎兄弟を射殺すところ。第一圖にくらべて百合若の變り方のひどいのをよく觀察させる。

（三）準　備

掛圖。

十八　百　合　若

三　參考

原據は　舞の本「百合草若大臣」である。上田萬年先生校訂のものに、指導者は是非一度眼を通したい。原文には地名等が委しくあるし、話も一層委しくなつてゐるが、補說の必要もないし省略した趣旨は尊重したい。

十九　ひなまつり

一　要旨

此の韻文を讀み味はせて日本的國民的傳統的の優雅ななごやかな樂しいひなまつりの氣分を味はせ年中行事としてのひなまつりをなつかしむ心を養ふ。

二　教材觀

（一）ひなまつりは早春への序曲である。いよ〳〵春が來る。そのうれしさ、樂しさ、なつかしさを表はして生活の愉悅を暗示するものである。編纂體系からいへば男性的な百合若の武勇の次に此の優雅な教材を採り、北風と南風、羽衣の早春への三主題をたくみに配して、文學的に、心理的に、生活の喜びを味はせ、よく其の氣分情趣にひたつていよ〳〵喜びの新學年を迎へるための教材である。

（二）ひなまつりは、女のお節句として古來より年中行事の一として女子の喜ぶものである。その日本的、國民的な情緒を落ついた七五調の韻文によつて優雅にうたはれてゐる。殊に近年ます〳〵かうした家庭的な古風なものが漸次學校教育の中に取入れられて低學年教育としては特に重視されて來たかの感がある。

（三）しかも、子供の手によつておひなさまのおまつりを行ふ、そして喜んでゐる、その上、おひなさまを生きたものとして遊んでゐる、「おひなさまもうれしさう」と歌つてゐるところに、いかにも此の子供のすなほな、純眞な、いかにも女らしい優しさがもられてある。

（四）第一、二節は主として、ひなまつりの實景を描寫的に說明してゐる。第一節はかざつたところの描寫說明であり、第二節はいろ〳〵の供物についてうたつてある。第三節は、第一、二節の描寫に對して子供の遊びのたのしさを稍主觀的な心持でうたつてある。實感と想像に訴へて十分讀味はせることが大切である。

三　朗讀

本文

122　頁

ジューク。。ヒナマツリ。。

マッカナ　モーセン　ヒノ　モーセン。

キンノ　ビョーブニ　ダイリサマ。

十九　ひなまつり

朗讀上の注意

○全體を樂しい心持が表れるやうに讀む、あまり遲すぎない方がよい。

〔參考〕

ヒノ（緋の・日の）

ヒノ（火の）

ゴニンバヤシヤ　カンジョタチ。。

カワイー　ボンボリ　モモノ　ハナ。

アラレ　ヒシモチ　オシロザケ。

ソナエテ　キョーノ　ヒナマツリ。。

トモダチ　ヨンデ　ニギヤカニ

オハナシ　シタリ　ウタッタリ。

オヒナサマモ　ウレシソー。。。

○「かはいゝ」はカワイーとワをはつきり讀む。カアイーとなることがあるから注意を要する。

〔參考〕
ヨンデ（呼んで）
ヨンデ（讀んで）

一　指導概要

（一）教材

(1) 各教室にそれ〴〵子供達におひなさまをかざらせる。

(2) その前でたのしかつたおひなさままつりの經驗を發表させる。

(3) 自由讀により更に適切に讀みを指導し讀みになれさせて詩の心を言語化し、場面を想像させ且つ吟味をする。

(4) 文の言葉と挿畫の對象によつて供物、人形のかざり方などをはつきりさせ、一層、これ等の名稱と讀本の詩の文句とをむすぶ。

(5) 文の言葉化を一層修練し、諳誦させ誦寫させる。

(6) 新出文字は官　桃　友の三字。讀替としては女の一字があるだけで別に特記すべきことはない。

（二）挿畫

美しい落ついた氣分のする繪である、大部分のかざり附けが終つて、今、四段目のお膳をお供へしようとしてゐるところ。子供の二人は姉と妹としてもよいし、或はお友達が遊びに來てゐると想像させてもよい。

（三）準備

掛圖。おひなさままつりとして教室にかざるに必要なもの。

二　參考

このひなだんのかざり方は、平安朝時代の大極殿の御有樣を模したものである。金屏風、雪洞、左近の櫻、右近の橘みな古の九重の奥の雛形である。内裏樣は長くも一天萬乘の御二方を象つたもの。鏡、長持其他の調度は昔をしのぶとともに家庭生活に於ける女の身のまはりのものとしての理想化を語るものである。

二十　北風ト南風

一　要旨

北風と南風とが、冬から春へかけて互に勢を爭ひ、やがて暖い南風が寒い北風を追拂ひ、綠の若草や赤い花で山野を飾る光景を讀みとらせ、冬と春の自然現象、並に季節の推移を知らせ、擬人文の興味を養ふ。

二　指導觀

（一）冬から春への轉換期に於ける北風と南風との一進一退から、遂に猛威を逞しうする北風を驅逐して、南風が野山を占據する鬪爭の有樣を擬人化した科學的童話である。季節の推移による氣象――霜や氷や雪や雨を、北風と南風との野山の爭奪戰に擬し、取つたり取られたりする狀況を巧みに象徴し、やがて太陽の援軍を得て、完全に北風を克服する南風の威力を目に見るやうに表現してゐる所は誠に興味深く讀まれる。

（二）早春の季節がよく觀照されてゐることは言ふ迄もなく、南風の勝利を春立つ野山の光によつて描き出し、更に南風の堂々たる宣言を以て結んでゐるあたり少しの無理もない。南風の北風征服史とも見られるが、また正義の女神の惡魔降伏譚とも見られよう。そこに童話的興味がある。

即ち北風と南風は破壞と建設とを代表する二つの神の對立である。猛威を振るふ北風は、自然及び人生に對する破壞作用としての感情をもつ惡魔であり、之に反して南風は萬物を撫育し建設する作用の感情を代表する正義の女神である。この南風と北風とが對立し抗爭し交戰する所に、自ら兒童は敵と味方とを想起し、且つ惡魔と正義の神とを聯想するに相違ない。この惡魔滅びて正義の神の勝つ大團圓はまた兒童の童話的興味をそゝる。この點も亦指導上の着眼點と見てよからう。

（三）內容を檢討して指導の觀點を明かにしよう。「大ソウ仲ガワルイヤウデス」最初の起筆は擬人化の態度を示し既に抗爭と思はせてゐる。「寒イ北風ガビュウビュウト吹キマハリマス。」北風が猛威を振つてゐる時代。「少シデモユダンヲシテキルト、暖イ南風ガソツトヤツテ來マス。」さういふ時にも勇敢に攻め寄せる南風の意氣である。「スルト、北風ハスグ追ヒハラヒマス」と、忽ち擊退されてしまふ。「コンナコトヲ何ベンモクリカヘシテキルウチニ」謂はゞ斥候戰か、偵察戰である。戰はまだ機が熟さず滿を持して待機中とも思はれる。その中に「今マデハ……弱イ光ヲ出シテキタオ日樣ガ、ダン〳〵暖イ光ヲ送ルヤウニナリマス。」こゝに南風は强力な援軍を得たのである。「北風オ前ハモウ北ノ國ヘカヘツテシマヘ。」と、いよ〳〵明かに攻勢の態度をとつて、積極的戰意を宣言する。「ナアニ、マダオ前ノ出テ來ル時デハナイ」北風もさるもの、さうおめ〳〵退却はしない。最後の決戰を試みようと堂々對抗の意氣をあげてゐる。「サウシテ、アリツタケノ力ヲ出シテ、南風ヲ追立テマス。」遂に野や山は雪でまつ白に北風の旗がひらめく。しかし全力を擧げての戰に、再起覺束ないまで損害を受けるので、南風はこゝぞと得意にもはや勝利我にありと、「スグニ元氣ヲモリカヘシマス、南ノ國カラ大ゼイノ仲間ヲ連レテ來テ、北風ヲドシ〳〵ト追ヒマクリマス。」その追擊の猛烈さ、北風最後の逆襲に折角占領した野も山も、南風の爲に、日に日に形勢は逆轉して、南風は草木の芽を伸ばし、花の蕾をふくらませ、やうやく和平の皇道樂土を建設する。さうして宣言するのである。「ワタシハ　北風ガ霜ヤ雪デ野山ヲマツ白ニシタカハリニ、赤イ花ヤミドリノ若草デ、野山ヲカザツテ見セヨウ」と、萬物に

新しい命を與へる南風は正義の旗を靡してその仁政を布くのである。かういふ點を十分に吟味して、興味深く讀み味はせなくてはならない。さうしてその間に季節の推移に伴ふ氣象の變化を明かに知らせることが大切である。

三　朗讀

頁	124	125	126
本文	ニジューッ・キタカゼト　ミナミカゼッッ	フラセタリ。ミズオ　コーラセタリ　シマスッッ	シカシ。キタカゼガ　スコシ　ユダンオ　シテ　イルト。アタタカイミナミカゼガ　ソット　ヤッテ　キマスッッソーシテ。キタカゼノ　ツクッタ　ユキノ　ヤマヤ　コーリノイケオ。スコシデモ　トカソートシマスッスルト　キタカゼワ　スグミナミカゼオ　オイハライマスッッコンナ　コトオ　ナンベンモ　クリカエシテ　イル　ウチニ　フユガオワリニ　チカズイテ　キマスッソ
朗讀上の注意	○全體を稍速く、北風と南風と陰陽の二面を對照させて讀むとよい。 ○「北風」「南風」のアクセントはキタカゼ　ミナミカゼといふこともある。 ○「ワルイヤウデス」と續けていふ時、ヨーデスのアクセントはあまり高くならない。 〔參考〕 ユキ（行・術） ユキ（雪）	○「コホラセタリシマス」と續けていふ時、シマスのアクセントはあまり高くならない。	○「ヤッテキマス」と續けていふ時、キマスのアクセントはあまり高くならない。 〔參考〕 コーリ（氷） コーリ（高利・行李・公吏） ○「トカサウトシマス」と續けていふ時、シマスのアクセントはあまり高くならない。 ○「コンナコトヲ」を別々にいふ時、アクセントはコンナ　コトオとなる。 ○「近ダイテ來マス」と續けていふ時、キマスのアクセントはあまり高くならない。

ーシテ。イママデワ　ハンブン　ネ
ムッテデモ　イル　ヨーニ。ヨワイ
ヒカリオ　ダシテ　イタ　オヒサ
マガ。ダンダン　アタタカイ　ヒカ
リオ　オクル　ヨーニ　ナリマス。。。
コー　ナッテ　クルト。ミナミカゼ
ワ　モー　マエノ　ヨーニ　マケテ
バカリワ　イマセン。。
キタカゼ。オマエワ　モー　キタ
ノ　クニエ　カエッテ　シマエ、
ト　ミナミカゼガ　イーマス。。スル
ト　キタカゼワ。
ナーニ　マダ　オマエノ　デテ

〔參　考〕
コト（事）
コト（琴）
イル（居る・入る）
イル（射る・煎る・鑄る）
オワリ（終）
オワリ（尾張）
○「キルヤウニ」「送ルヤウニ」をそれ〴〵別々にいふ時、アクセントはイル　ヨーニ・オクル　ヨーニとなる。
〔參　考〕
ダンダン（段々―副詞）
ダンダン（段々―名詞）
○「カウナッテ」を別々にいふ時、アクセントはコー　ナッテとなる。
○「前ノヤウニ」と續けていふ時、ヨーニのアクセントはあまり高くならない。
○「カヘッテシマヘ」は下り調子にいふがよい。
○「ナアニ」からの言葉は負惜みと、自信と、敵愾心とを籠めた氣持でいふとよい。

クル　トキデワ　ナイ。。ワタシワ
モー　イチド　オマエオ　オイ
ハラッテ　ノヤ　ヤマオ　マッシ
ロニ　シテ　ヤル、
ト　コタエマス。。ソーシテ。アリッ
タケノ　チカラオ　ダシテ　ミナミ
カゼオ　オイタテマス。。ノヤ　ヤマ
ガ　マタ　ユキデ　マッシロニ　ナ
リマス。。。
シカシ　ミナミカゼワ　スグニ　ゲ
ンキオ　モリカエシマス。。ソーシ
テ。ミナミノ　クニカラ　オーゼー
ノ　ナカマオ　ツレテキテ。キタカ

○「出テ來ル」と續けていふ時、クルのアクセントはあまり高くならない。
〔參　考〕
マタ・マタ（又）
マタ（胯・又）
○「マッ白ニナリマス」と續けていふ時、ナリマスのアクセントはあまり高くならない。
○「シカシ」の次は切らないですぐ下に續ける方がよい。

ゼオ　ドシドシト　オイマクリマス　ユキデモ　シモデモ　コーリデモ　カタハシカラ　トカシテ　ノヤヤマオ　アタタカク　シマス　アタカイ　アメオ　ナンベンカ　フラセマス　スルト　クサヤ　キガダンダント　メオ　フキ　ハナノツボミガ　フクランデ　キマス　ミナミカゼワ　イーマス　キタカゼガ　シモヤ　ユキデ　ノヤマオ　マッシロニ　シタ　カワリニ　ワタシワ　アカイ　ハナヤミドリノ　ワカクサデ　ノヤマ

○「暖クシマス」と續けていふ時、シマスのアクセントはあまり高くならない。

〔參考〕

アメ（雨）

アメ（飴）

○「フクランデ來マス」を別々にいふ時、アクセントはフクランデキマスとなる。

〔參考〕

ハナ（鼻）

ハナ（最初）

ハナ（花）

一　オ　カザッテ　ミセヨー

四　指導概說

（一）教材

(1) まづ全文を十分によませて、その大要をつかませる。それには文字語句を明かにして、何遍もくりかへし讀ませる。大要といふのは、

イ、冬の間北風がふいて雪やあられを降らし水を凍らせるが、その間に南風がそつとやつて來る。

ロ、が、北風に追ひたてられる、とまた南風が吹く。又北風に吹きまくられる。こんなにして何べんか爭つてゐる。

ハ、その中にお日樣が暖かい光を出すので、南風はとう〳〵北風を追ひはらつてしまふ。

ニ、さうして野山は赤い花とみどりの若草でかざられる。

この程度である。

(2) 次に文意の深究により、叙述を細かく吟味し究明して、その情景を具體化し、いくさの樣子——野山の有樣をよみ味はせる。その一つ一つは既に詳述したからこゝには略する。なほこの對立抗爭は一面童話的に、一面科學的に、巧みにおり込んでその事實實況を吟味し躍動せしめることが肝要である。その一方のみに偏してはならない。

(3) 尙內容の吟味としては、北風の活動と南風の活動とを對照して、比較考察せしめ、その本領を發揮してゐる所

を玩味せしめることが大切である。さうしてその行動を表す叙述を特色づけてはつきりよみとらせる。

(4) 新出文字も多い。十二字は一課としては相當に困難を感ずるであらうが、十分その收得をはかる。語句はさしてむづかしいものはないが、その文に即した具體的の意味をはつきり解らせることにつとめなくてはならない。

(二) 挿畫

(1) 冬の間北風が猛威を擅にする所、雪におほはれた人家、强風に吹かれる丘の上の村、吹雪の荒れ狂ふ光景などよく觀察させる。

(2) 春になつてぽか〳〵と暖く南風の吹く樣子を描いた所。水もぬるんで大川の岸に何かもの洗ふ人。青く芽ぐむ木の芽、土手の若草、暖かにお日樣もにこ〳〵してゐる樣をも想像させる。

二十一　羽衣

一　要旨

漁夫伯良が霞立つ春の日に美しい三保の松原の景色にみとれながら歩き、松の枝にかゝつてゐる天人の羽衣を見つけそれを自分のものにしようとした人間世界の俗惡醜態を天人に知られ、恥を知るのであつたが、天人の崇高淸淨な心と姿が三保の松原や富士の崇麗な自然美と融合して作る夢幻境に、そして幽玄な昇天の舞ひと音樂と香りとが軟かな霞に消えてゆく時、自ら無我沒我の境に引き入れられて行つたその心を心として讀みとらせ、美しく淨らかなものゝ浸潤から民族的な美的情操に觸れさせ、豐かな想像の世界に遊ばせる。

二　指導觀

(一) 國民的な童話の一つで、情趣豐かな國民傳說である。天人の物語によつて、高雅な神韻渺茫たる境地を想はせ戲曲風に描かれた詩の香氣高い文である。

(二) この文は、時間的のひろがりがなく、又場面も一定してゐて、地文がその瞬間の心持とそれを表はす動作とを表現してゐる、單なる說明や解說ではない。勿論この文は讀物であるが、直ちにこれだけで劇として演出し得る脚本的な色彩を多分にもつてゐる。この表現形式は、今までの文にはあまり見られないくだけた脚本形式で文學的要素を多分に盛られた編纂の精神が窺へて嬉しい。純然たる脚本は現在に於ても又將來に於ても敎科書には入れられないらしいが、この文などはその意味からも重要視されなければならない表現形式である。

(三) 歌は序と天人の歌と結びとになつてゐる。序の歌は、三保の松原を表はしてゐて、七五、七五のリズム二聯、第一聯では、眼を下に松原の白い砂に寄せては返す靑い波を歌ひ、第二聯では、眼をはるかにかすみたつ空にうつし飛ぶかもめの姿と富士の秀麗を眺め、三保の松原の景色をたゝへ、

天人の歌は、(三、四)(四、三)(三、四)(四、三)(三、四)、五のリズム即ち七、七、七、七、七、五である歌は簡單で深みは感じないが、平易で子供にもよく理解できるであらうし、(三、四)(四、三)のリズムに民謠調が感ぜられる。第一聯に、やみ夜を、第二聯に、月明を歌つてゐるが、この歌は、原據謠曲「羽衣」の地謠、「白衣黑衣の天人の云々」から出たもので、はるか見る天上の月の神秘を夢幻的に歌つたものである。

結びの歌は、天人の舞を見つめてゐる漁夫の心である。(三、四)、五、のくりかへしで、第一聯、第二聯は天と地の

動くリズム、「右に左にひら〳〵と動くたもと」は「濱邊に寄せては返す波」に響き合つてゐる。第三聯、第四聯に於て、いつか天人は春のかすみに消えて、鷗飛ぶ彼方に美しい富士の立姿がほんのりと夢のやうに浮ぶのである。

（四）地文と對話は全く天人と漁夫の心が動作と言葉によつて表現されてゐる。

美しい景色に見とれて夢心地に歩く、羽衣を見出して、いぶかりの言葉を發し、自分の物にしようといふ。天人が、返して下さいといふのに對し、醜き人間の心のうごきを見せる。天人は天にかへるよすがもなく悲しく空を見上げる「いや、いけません。返されません。」さうした人間の意地の醜さを悲しんでゐたのだ。

さすがに氣のどくに思つた漁夫、しかし「その代りに」と交換條件をもち出し、「まはずにかへつておしまひになるでせう。」と疑ふ。しかし「天人はけつしてうそを申しません。」といふ天人の眞實と清淨な心に觸れて、人間凡夫の淺ましさを恥ぢ、清められた心は再び自然美と融合して夢幻の境地、沒我境に入つて行くのである。

（五）科白は何れもわかり易い。劇としては、次の樣な構成をとつてゐる。

序曲（合唱）　松原の景
漁夫登場　漫歩　羽衣を持つ、
天人登場　對話（人間凡夫の醜惡）
天人（獨唱）　舞、夢幻境
終曲（合唱）　沒我恍惚境

頁	本文	朗讀上の注意
130	ニジュー　イチ°°ハ°ゴロモ°°	
131	シロイ　ハマベノ マツバラニ° ナミガ　ヨセタリ カエシタリ°°°	○此のうたによつて長閑な濱邊の情景があらはれるやうに稍ゆつくりと讀む。 ○會話に於ける「れふし」「女」「天人」は朗讀の際は一々讀まなくてもよい。
132	カモメ　スイスイ トンデ　イク° ソラニ　カスンダ フジノ　ヤマ°°° ヒトリノ　リョーシガ°　ミオノ　マ	○「れふし」「女」「天人」のアクセントは次のやうである。 リョーシ。オンナ。テンニン。 ○「富士の山」と續けていふ時、ヤマのアクセントはあまり高くならない。以下同斷

ツバラエ デテ キマシタ
アー ヨイ オテンキダ ソーシテ マー ナントユー ヨイ ケシキダロー
ケシキニ ミトレナガラ アルイテイマスト ドコカラカ ヨイ ニオイガ シテ キマシタ フト ミルト、ムコーノ マツノ エダニナニカ キレーナ モノガ カカッテ イマス
オヤ アレワ ナンダローナ
リョーシワ ソバエ ヨッテ ヨクミマシタ

一六四

○「出て來ました」と續けていふ時、キマシタのアクセントはあまり高くならない。
○「あゝ」はアクセント不定。
○「けしきだらう」の終は下り調子にいふがよい。
○「して來ました」を別々にいふ時、アクセントはシテ キマシタとなる。
○「かゝってゐます」と續けていふ時、イマスのアクセントはあまり高くならない。
○「おや」のアクセントは不定であるが、こゝでは上記のやうにいふ。
○「何だらうな」の終は上り調子にいふがよい。

キモノダ コンナ キレーナ キモノワ マダ ミタ コトガ ナイ モッテカエッテ ウチノ タカラモノニ シヨー
リョーシワ ソノ キモノオ トッテ モッテ イコート シマシタ スルト ソノ マツノキノ ウシロカラ ヒトリノ オンナガ デテキマシタ
モシ ソレワ ワタクシノ キモノデ ゴザイマス ドーシテ オモチニ ナルノデ ゴザイマスカ

二十一 羽衣

○「着物だ」は稍强めて幾分速くいふ。
○「見たことが」と續けていふ時、コトガのアクセントはあまり高くならない。
○「出て來ました」と續けていふ時、キマシタのアクセントはあまり高くならない。
○「お持ちになるので」を別々にいふ時、アクセントはオモチニナルノデとなる。
○「どざいますか」の終は下り調子にいふ。但し天人の言葉であるからあまり詰問的に强くいつてはいけない。

イヤ　コレワ　ワタシガ　ヒロッタノデス。モッテカエッテ　ウチノ　タカラモノニ　シヨート　オモイマス。

ソレワ　テンニンノ　ハゴロモデ。アナタガタニワ　ゴヨーノ　ナイモノデ　ゴザイマス。ドーゾ　オカエシ　クダサイマセ。

テンニンノ　ハゴロモナラ　ナオサラ　オカエシワ　デキマセン。ニッポンノ　タカラモノニ　シマス。

ソレガ　ナイト。ワタクシワ　テンエ　カエル　コトガ　デキマセン。ドーゾ　オカエシ　クダサイマセ。

イヤ　イケマセン。カエサレマセン。

リョーシワ　ドーシテモ　カエシマセン。テンニンワ　カナシソーナカオオ　シテ。ジット　ソラオミアゲマシタ。

テンニンノ　シオレタ　ヨースオミテ。リョーシモ　キノドクニ　オモイマシタ。

アンマリ　オキノドクデスカラ。

○「たから物に」はタカラモノニともいふ。

○「ないものでございます」と續けていふ時、下の二語のアクセントはあまり高くならない。

○「お返し下さいませ」を別々にいふ時、アクセントはオカエシクダサイマセとなる。以下同斷

○「なほさら」はナオサラともいふ。

○「日本」を單獨にいふ場合のアクセントはニッポンであるが、ここでは助詞「の」を伴つたために平板式となる。

○「かへることが」と續けていふ時、コトガのアクセントはあまり高くならない。

○「どうぞ、お返し下さいませ」は嘆願する氣持があらはれるやうに柔かみを失はない程度で稍强くいふ。

○次のれふしの答は稍速くいふがよい。

○「悲しさうな」のシの母音が無聲化し易いが、さうしない方がはつきりしてよい。

ハゴロモオ　オカエシ　イタシマ
ショーᵖᵖ

ソレワ　アリガトー　ゴザイマ
スᵖᵖデワ　コチラエ　イタダキマ
ショーᵖᵖ

オマチクダサイᵖᵖ　ソノ　カワリ
ニ　テンニンノ　マイオ　マッテ
ミセテ　クダサイマセンカᵖᵖ

オカゲデ　テンエ　カエラレマ
スᵖᵖオレーニ　マイオ　イタシマ
ショーᵖᵖデモ　ソノ　ハゴロモガ
ナイト　マウ　コトガ　デキマ
センᵖᵖ

一六八

○「お返しいたしませう」を別々にいふ時、アクセントはオカエシイタシマショーとなる。

○「ありがたうございます」と續けていふ時、ゴザイマスのアクセントはあまり高くならない。

○「見せて下さいませんか」の終は下り調子にいふ。

○「まふ」をモーといつてはいけない。

○「まふことが」はマウコトガともいふ。

ト　イッテ　ハゴロモオ　オカエ
シ　シタラ　アナタワ　マワズニ
カエッテ　オシマイニ　ナルデ
ショーᵖᵖ

イーエ　テンニンワ　ケッシテ
ウソオ　モーシマセンᵖᵖ

アー　ハズカシー　コトオ　モー
シマシタᵖᵖ

リョーシワ　ハゴロモオ　カエシマ
シタᵖᵖᵖ　テンニンワ　ソレオ　キテ
シズカニ　マイハジメマシタᵖᵖᵖ

ツキノ　ミヤコノ
テンニンタチガ

二十一　羽衣

○「おしまひになるでせう」を別々にいふ時アクセントはオシマイニナルデショーとなる。
尙「なるでせう」の終は下り調子にいふ。

○「はづかしいことを」と續けていふ時、コトオのアクセントはあまり高くならない。

〔參考〕
ツキノ（月の）
ツキ（月）
オツキサマ（お月樣）

一六九

クロイ　コロモノ
ソロイデ　マウト。
・ツキワ　マックロ
ヤミノ　ヨル。。。

○「そろひで」はソロイデともいふ。以下同斷
○「まふと」をモートといつてはいけない。以下同斷

・ツキノ　ミヤコノ
テンニンタチガ
シロイ　コロモノ
ソロイデ　マウト。
・ツキワ　ジューゴヤ
マンマルイ。。。
テンニンワ。マイナガラ　ダンダン
テンエ　ソボッテ　イキマ・シタ。。。

○「上つて行きました」を別々にいふ時、アクセントはノボッテ　イキマシタとなる。

ミギニ　ヒダリニ
ヒラヒラト。
ウゴク　タモトノ
ウツク・シサ。。

シロイ　ハマベノ
マツバラニ。
ナミガ　ヨセタリ
カエ・シタリ。。

イツノ　マニヤラ
テンニンワ
ハルノ　カスミニ

○「いつの間にやら」を別々にいふ時、アクセントはイツノ　マニヤラとなる。

・ツツマレテ。。

カモメ　スイスイ
トンデ　イク。
ソラニ　ホンノリ
フジノ　ヤマ。。。

〔參考〕
ハル（春）
ハル（張る）
フジ（富士・不時）
フジ（藤）

一　指導概要

（一）教材

(1) 文は十三頁に亘る長篇で、而も表現形式は綜合的な複雜性を持つてゐるが、さうしたことは素直に讀み浸らせる分にはさして困難はない筈である。

(2) かゝる教材の指導に當つては通讀よくその場面や情景を直觀想像させることが大切である。この文などは最初から最後まで全文取扱ひをなすべきである。前奏曲即ち序の歌にしても第一聯と第二聯は地と空を對照してながめ、天人の歌にしても闇と月明を歌ひ、序の歌と結びの歌とは自ら交響し合つてゐるし、地文が言葉と動作であらはされて科白と極めて密接に表現されてゐるといふ具合で、全體的な綜合的な美的感

情が全文を通じて醞釀されて來るのであるから、全文的取扱によつて統一の美即ち構想の美等に觸れさせるといふ讀み方を實踐しなければならない。

(3) 新出文字は衣、原、寄、返、富、士、悲、代の八字である。しかし富、と士、とは既に假名づきで第一課に出してあつたから、眞の新出文字は六字に過ぎない讀替文字は一つも提出してない十三頁に八字の新出文字では文字としての負擔は左程ないが、讀み、書き字源、活用等にも及んで十分修練させて置かなければならない。

(4) 語句にもそれ程困難なものはないが新語句とも云ふべきものには、「波がよせたり返したり、」「かすんだ」「見とれる、」「天人のしをれたやうす、」「まひをまふ、」「はづかしいこと、」「黑衣のそろひ、」動くたもとのうつくしさ、」「春のかすみに包まれて、」「空はほんのり、」等がある。又天人の上品な言葉遣、漁夫もまた上品な敬語をつかつてゐる。叙述語があり詩的な言葉もあるから十分しらべて學年相應に工夫して指導し確實に了得させて置かなければならない。

(5) 文の全體が劇的構成になつてゐることは既に指導觀に述べて置いた。序曲、地文、科白、天人の舞曲、終曲、等を理解させなければならない。次に少しく解釋して見よう。「あゝ、よいお天氣だ。さうして、まあ何といふよいけしきだらう。」はこの一篇の空氣情調をかもし出す楔機となつてをり、「持つてかへつてうちのたからものにしよう。」には物に對する好奇心、執着が動き、「わたしが拾つたのです。」だから私のだといふのは下界の淺ましい理窟である。「天人の羽衣ならなほさらお返しは出來ません」も同じ、「日本のたからものにします」などはをこがましい。「いや、いけません。返されません。」かうなると意地である。「あんまりおきのどくですから……。」漁夫の心も木石ではない。「その代りに……」交換條件を出してゐる。「あなたはまはずにかへ

つて……。」疑も亦下界のもの、「あゝ、はづかしいことを……。」天人によつて覺醒させられ、かくて天人の舞に見入る漁夫は沒我で淸らかである。

かうした取扱ひで劇的場面をまともに見せ音樂を聽かせ舞を見る態度を作つてやりたいものである。

(6) 劇的表現の文であるから、これを見るごとく聽くが如くに讀み得れば、そこから實演への意志が觸發され劇化演出の作業發展が欲求されるであらう。かうして文學的な筋、內容を知ると共に美的民族的情操も養はれて行くのである。

(二) 挿畫

百四十頁から百四十一頁に亘る挿畫は漁夫伯良が天女昇天の美しさに見とれてゐる。所は三保の松原、白砂靑松の美しい場面である。天女は頭に華甍をつけて上品優雅な姿である。

(三) 準備

掛圖。

三 參考

原據　謠曲「羽衣」

讀本指導と朗讀法　卷四（終り）

尋常科用
讀本指導と朗讀法
卷四

昭和十二年九月十五日印刷
昭和十二年九月二十日發行

定價一圓

東京朗讀研究會
著作者　代表者　藤野重次郎

東京市日本橋區通三丁目一番地
發行者　河出孝雄

東京京橋區銀座西一丁目七番地
印刷所　福神製本印刷所

東京・日本橋・通三丁目
發行所　成美堂
電話日本橋一七四八番
電話日本橋二七七七番

263.
523